海士町歷史文化基本構想



平成30年3月 島根県隠岐郡海士町

日本海に浮かぶ隠岐諸島の一つである海士町は特色のある島です。島のあちこちから湧き水が出て、その水で水田を張り、秋には黄金色に輝く米が収穫されます。山頂から見渡せば、周囲は海に囲まれカルデラの地形は内海と外海をつくり、海の幸をもたらしてくれます。また、離島であるために独自の生態系が生まれ貴重な動植物も見られます。そこに暮らす人々はこの景観の保全に努めながら、昔から伝わる大切な歴史や文化、文化遺産などを受け継ぎ、四季折々の中に行事等として折り込み、人情豊かに生活してきました。

その中で特筆すべきは後鳥羽上皇の配流です。1221年より19年間の生活の中で数多くの 和歌を詠まれ、刀剣を打たれ、蹴鞠をお広めするなど、日本で超一流の文化人としての功 績を残されてきました。島民からは今も「後鳥羽んさん」と親しまれています。

しかし、少子高齢化の波が日本全体に押し寄せ、この島も例外でなく加速度的に人口減少をもたらし、これまで繋いできた伝統文化や地域の文化財などを後世に繋ぐ力が弱くなり、祖先が大切にしてきたものが繋げなくなり、このままでは貴重な文化財や歴史が途絶えてしまうことは目に見えています。

この島の価値あるものを未来に伝えていく事が大切であり、その意志を強く持って、みなでその価値を再認識して、保存活用を図ることが私たち島民の役目であると考え、ここに海士町歴史文化基本構想を策定するものです。

「ないものはない」という海士町のキャッチフレーズの中に、大切なものはすべてこの 島にあることをアピールし、それをつなげることこそが我々の使命であると考えています。 最後になりましたが、この海士町歴史文化基本構想の策定に当たり、ご指導いただきまし た三重県総合博物館館長大野照文先生を始め、京都大学総合博物館館長岩﨑奈緒子先生、 島根県文化財課様、海士町歴史文化基本構想策定委員の皆様にお礼と感謝申し上げます。 また、町民の皆様からのご意見等をいただきましたことに重ねてお礼を申し上げます。

> 平成 30 年 3 月 海士町教育委員会 教育長 平木千秋

目次

第1章 歴史文化本構想の概要	. 1
1-1. 歴史文化基本構想策定の背景と目的	. 1
1-2. 歴史文化基本構想から期待できる効果	. 3
1-3. 海士町歴史文化基本構想の策定体制	. 4
1-4. 海士町歴史文化基本構想の策定手順	. 5
第2章 海士町の現状	. 9
2-1. 海士町の概況	. 9
· 位置 人口 交通状況 気候	
2-2. 海士町の産業	12
・農業 畜産業 漁業・水産業	
2-3. 海士町の歴史	14
・縄文時代 弥生時代 古代 中世 戦国時代 近世 近現代	
2-4. 海士町の自然	16
・地質・地形 植物 動物 隠岐ユネスコ世界ジオパーク	
第3章 海士町の歴史文化の特徴	19
3-1. 海士町の歴史文化の特徴	19
3-2. 海士町の指定文化財	19
3-3. 文化財の地域別聞き取り調査の方法と実施状況	
3-4. 海士町遺産とは	
・モノ	
神社	
古民家	
庚申塔	
一字一石経塔	
銅剣	

	彫刻	56
	刀	58
	台子皆具一式	62
	書籍	62
	希少植物	64
	・コト	68
	年中行事	68
	神話・伝承	72
	承久楽	75
	島前神楽	76
	· ヒト	77
	庄屋	77
	遠流の島 海士町	
	偉人	
	海運 牧畑 養蚕	
	いも倉 畜産 船小屋 カナギ漁	82
第	4章 海士町遺産の保存活用区域	83
4	4-1. 海士町遺産の保存活用区域の目的	83
4	4-2. 海士町遺産の保存活用区域の基本方針	83
4	4-3. 海士町遺産の保存活用区域の設定	83
	・後鳥羽上皇ロードエリア ~後鳥羽上皇の暮らした軌跡~	85
	・大地の成り立ちエリア ~寄生火山が生み出す大地の恵み~	88
	・独自の生態系エリア ~大陸の遺伝子を残す日本海に浮かぶ南国の島~	90
	・交流エリア ~大陸との交流の玄関口~	93
	・くにびき神話エリア ~島内のもう一つの文化圏~	96
第	5章 海士町遺産の保存活用計画	98
	5-1. 海士町遺産の保存活用のための体制	98
ļ	5-2.海士町遺産を保存活用するための課題	98
ļ	5-3.海士町遺産の保存活用方針	00
ļ	5-4.海士町遺産保存活用区域での取り組み	02
ļ	5-5.今後目指していく海士町遺産を活かした地域づくりの方針	105

第1章 歴史文化基本構想の概要

1-1. 歴史文化基本構想策定の背景と目的

○歴史文化基本構想の定義

歴史文化基本構想とは、地域に存在する文化財を、指定、未指定にかかわらず、その周辺環境まで含めて幅広くかつ的確に把握し、総合的に保存活用するための構想であり、地方公共団体が文化財保護行政を進めるための基本的な構想である。

海士町では、平成30年(2018年)3月までに34件の指定文化財がある。他にも、指定文化財には至っていないまでも海士町内には数多くの様々な未指定の文化財も存在する。指定文化財と未指定の文化財及びその周辺の自然環境を総称して「海士町遺産」とし、「モノ」、「コト」、「ヒト」の3種類の大分類に分け、さらにその3種類を細分化した小分類により海士町の歴史文化を特徴づけるものを明確にする。そして、海士町の他の関連する計画と連携しながら、海士町の歴史文化を後世に伝えていくための構想を海士町歴史文化基本構想とする。

○海士町歴史文化基本構想策定の背景

海士町遺産を保存活用するための基本情報が十全に整理されておらず、現状のままでは今後の対策が困難になっている。特に指定の無形文化財については口承による継承の割合が高く、明文化され、まとめられている資料は少なく、それぞれ伝統文化の外形は残るが本質が失われていくことが危惧されている。海士町内にその文化を継承している在来の島民が減少している中、20代から40代の若い移住者が増加している現状もあり、新たな移住者も後継者として捉えると、近年は指定文化財を今後に引き継ぐ資料整理に適している時期であると考えられる。そこで、悉皆調査を実施し、海士町遺産のリストを作成する作業を行い、今後の海士町における歴史文化の保存活用の方針を策定する。さらに、海士町遺産に保存活用エリアを設けて、後世に向け継承すべき事項を明確なものとしていく。また、海士町歴史文化基本構想を海士町創生総合戦略人口ビジョン(海士チャレンジプラン)、海士町総合振興計画、海士町景観計画、海士町希少野生動植物保護条例等のまちづくり計画との一体化を図ることで、海士町における文化財保護をより推進していくものとなることが期待できる。

○海士町歴史文化基本構想策定の目的

海士町では、「このままでは無人島になる」との強い危機感のもと、「ないものはない」の精神で、島の自立に向けた多くの挑戦を続けてきた。その姿が島の魅力となり、多くの交流と更なる挑戦を生み出している。この輝きの連鎖を絶やさぬため、次世代のまちづくりに対する挑戦への機運を取り入れ、住民との共創による「意志ある明るい未来」へと繋

いでいく「海士町創生総合戦略・人口ビジョン (海士チャレンジプラン)」を策定した。誰もが地域に愛着を持ち、生き生きと暮らせる、交流が盛んなまちづくりのため、文化財の分野においても、地域の魅力を高めていくため、また住民が地域に誇りを持つための資源として、文化財を保存活用することで地域の活性化につなげるためのマスタープランとして歴史文化基本構想を策定する。

1-2. 歴史文化基本構想から期待できる効果

海士町の歴史、文化、自然に関する情報は行政、民間団体、地区により個別に保有されており、一元化されていない。これらの情報を集約し一元化することで、海士町の資源を総合的に把握することができ、保存活用における方策が立てやすくなることが予想される。また、島内外のイベントで海士町を発信する際に、文化財の情報を用いることで、より海士町の魅力が明確になり、以下のような様々な効果が期待できる。

○保存活用体制の確立

情報の一元化で、海士町遺産を効率的に把握することができ、それにより適切な対応方法の検討が容易になる。つまり、管理体制を整えることで、海士町遺産の保存活用に必要な役割分担を行うことができ、より具体的な保存活用方法を決定することが可能になる。

○海士町の歴史、文化の継承への貢献

海士町では高齢化が進んでいる。このため歴史、文化を後世に引き継ぐための手法の整備が必要である。海士町歴史文化基本構想策定により、各地区で個別に存在している歴史、文化を統一的に把握できるようになることで、継承に必要な事項が明確となり、的確な取り組みやサポートを行うことができるようになる。

○文化財に対する興味関心の向上

各地区に点在する海士町遺産を把握することで、海士町の歴史、文化の価値を再確認、又は新発見することができる。これにより、住民の歴史、文化に対しての意識が向上すると考えられる。住民の意識の向上は、各地区において、海士町遺産の調査が積極的に行われたり、これらの保存活用の推進が図られたりすることが期待できる。

○文化財をふるさと教育充実のため、学校教育、社会教育で活用

学校教育では海士町遺産を学習することで、歴史、文化の特徴をより深く理解することが可能となる。また、社会教育においては、ふるさと教育の一環として郷土愛を育むための手段につなげていくことが可能となり、海士町の教育の一翼を担うことが期待できる。

○海士町の魅力発信への貢献

海士町の歴史、文化は離島という環境と大地の成り立ちに起因し、島外との交流によって 形成された海士町独自のものとなっている。歴史、文化、自然をこの構想で明確化するこ とで、その認識が容易になり、海士町の魅力を再発見することができる。このことは、観 光客や移住者に対し的確に魅力を発信することが可能となることに加え、海士町の交流文 化の継承も効果的に行われると予想される。

1-3. 海士町歴史文化基本構想の策定体制

海士町の歴史文化基本構想は、海士町のまちづくりの基本方針と具体的な実施計画を示した「海士町総合振興計画」が最上位計画であり、その活動計画を具体的にしたものが「海士町創生総合戦略人口ビジョン(海士チャレンジプラン)」である。この海士チャレンジプランは民間、役場職員の若手有志によって構成された「明日の海士をつくる会」のまちづくり計画を下地に策定されており、海士町のまちづくり活動の基本方針となっている。また、「海士町景観計画」は、海士町に特有の景観を守り後世に残していくという目的で策定された。「海士町希少野生動植物保護条例」は、動植物を対象に海士町の特別な自然環境及び海士町に存在する希少種や重要種をその周辺環境を含めて保全することを目的とする条例である。これらの海士町の方針の基礎となる制度と連携を深めながら、海士町遺産をまちづくり、景観保全、自然環境保全の視点で保存活用することを図る。

海士町歴史文化基本構想との関連が想定される、海士町総合振興計画、海士町創生総合戦略人口ビジョン (海士チャレンジプラン)、海士町景観計画、海士町希少野生動植物保護条例の連携体制は図1に示す。

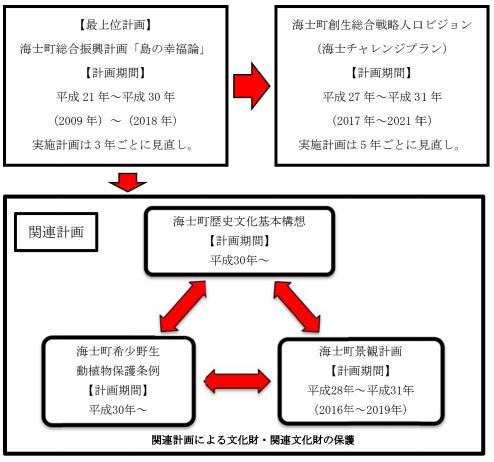


図1:最上位計画及び連携体制

1-4. 海士町歴史文化基本構想の策定手順

海士町歴史文化基本構想の策定にあたり、「文化財調査シート」を作成し、地区別にアンケート調査を行い、行事の聞き取り調査をすると共に専門的な現地調査(建築物調査、古文書、無形文化遺産調査、神話・伝承調査、動植物調査)を行った。また、地域有識者や海士町文化財保護審議委員などからヒアリングを行い、海士町の歴史文化の現状、課題、特徴の把握に努めた。さらに、教育委員会が事務局を務める海士町歴史文化基本構想策定委員会を設立し、策定委員の選定、構想の方針、構想の取り組みの決定、検討会を行った。地域住民を巻き込むための方策としてシンポジウムも開催し、専門家や地域の意見などを反映させた構想を作成した。

●作業行程●

作成の行程として、事務局が行う調査、資料収集の他、次のような取り組みを実施した。

○平成 28 年 10 月

「伝統文化・文化財調査シート」のアンケート、聞き取り調査開始。 策定まで継続的に、書籍・資料からの情報収集、専門的な現地調査を実施。

○平成28年度海士町歴史文化基本構想第1回検討会開催

日時:平成28年10月31日 会場:三重県総合博物館

【議事】

- ・海士町歴史文化基本構想の内容について
- ・海士町歴史文化基本構想の体制について
- ・海士町歴史文化基本構想の方向性について
- ・海士町歴史文化基本構想のシンポジウム開催について
- ・第2回、第3回の歴史文化基本構想の検討会について
- ○平成28年度海士町歴史文化基本構想第2回検討会開催

日時: 平成 29 年 1 月 29 日

会場:海士町開発センター会議室

【議事】

- ・歴史文化基本構想の内容について
- ・海士町歴史文化基本構想第1回検討会の内容について
- ・海士町歴史文化基本構想の組織図について
- ・今後の海士町歴史文化基本構想の作成日程について

○平成28年度海士町歴史文化基本構想シンポジウム開催

日時: 平成29年1月29日

会場:開発センター島民ホール

【テーマ】「わがとこのいいもんさがすだわい」

・基調講演「文化財はなぜ必要なのでしょう?どの様に利用することができるのでしょう?」

講師:大野照文(三重県総合博物館館長)

住民参加人数:54名

・フィールドワーク:海士町内の文化財を実際に見て学ぶまち歩き「ぶら東」を開催

内容:御火葬塚周辺の堀や隠岐神社周辺の地区の境界の意味を歩きながら解説

講師:大野照文氏(三重県総合博物館館長)、深谷治氏(海士町文化財保護審議委員)

住民参加人数:23名

○平成28年度海士町歴史文化基本構想第3回検討会開催

日時: 平成29年3月2日

会場:海士町開発センター会議室

【議事】

- ・海士町の文化財調査の状況について
- ・海士町歴史文化基本構想策定に向けて
- ・海士町歴史文化基本構想のイメージについて
- ・海士町役場の各部署協力イメージについて
- ・文化財パンフレットについて

○平成29年度海士町歴史文化基本構想第1回検討会開催

日時: 平成 29 年 12 月 1 日

会場:海士町開発センター会議室

【議事】

- ・海士町の文化財目録の確認
- ・保存・活用エリアマップについて
- ・保存・活用エリア詳細について
- ・進捗状況について
- ・第2回検討会・シンポジウムの日程
- ・シンポジウムの内容について

○平成29年度海士町歴史文化基本構想第2回検討会開催

日時: 平成30年1月20日

会場:海士町開発センター会議室

【議事】

- ・海士町役場との連携について
- ・海士町歴史文化基本構想の内容について最終確認
- ○平成29年度海士町歴史文化構想シンポジウム開催

日時; 平成30年1月20日

会場:開発センター島民ホール

【テーマ】「わしらの文化財をどげしていくか」

基調講演「地域の文化財の重要性」

講師:岩﨑奈緒子氏(京都大学総合博物館館長)

住民参加人数:24名

- ・パネルディスカッション「海士町の文化財をどう活用する」開催 パネリスト
 - · 大野照文氏(三重県総合博物館館長)
 - ·岩﨑奈緒子氏(京都大学総合博物館館長)
 - ・野辺一寛氏 (隠岐ユネスコジオパーク推進協議会事務局長)
 - ·村尾茂樹氏(海士町文化財保護審議委員)

住民参加人数:24名

○海士町文化財保護審議委員一覧

氏名	専門分野	地区
田邑福太郎	歴史	福井
丹後亜興	植物	豊田
榊原信也	歴史	菱浦
石塚仁志	歴史	中里
深谷治	動植物	東
村尾茂樹	歴史	宇受賀

○海士町歴史文化基本構想策定委員一覧

所属	専門分野	氏名
三重県総合博物館 館長	古生物	大野照文
京都大学総合博物館 館長	歴史	岩﨑奈緒子
京都造形芸術大学 歴史遺産学科 教授	芸術・建築	栗本徳子
隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会 事務局長	ジオパーク	野辺一寛
文化財保護審議委員	歴史	榊原信也
文化財保護審議委員	動植物	深谷治
文化財保護審議委員	歴史	村尾茂樹
海士町総務課 課長	教育	吉元操
海士町地産地商課 課長	地域産業	大江和彦
海士町環境整備課 課長	景観	松前一孝
海士町交流促進課 課長	観光	青山富寿生
海士町教育委員会 教育長	教育	平木千秋
海士町教育委員会 地域共育課 課長	教育	宮岡健二

○海士町歴史文化基本構想策定事務局

海士町教育委員会 地域共育課 係長	竹谷正人
NPO 法人隠岐しぜんむら	福田貴之

第2章 海士町の現状

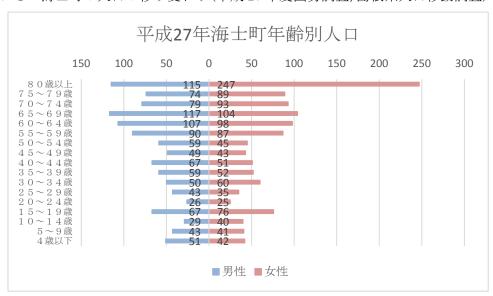
2-1. 海士町の概況

海士町は島根半島の北方沖合約 60 kmに浮かぶ隠岐諸島の1つである中ノ島の全域を占める。1島1町の面積は33.46 km、周囲89.1 km、人口は2,353人(平成27年度国勢調査)である。出生数の減少に伴う少子高齢化により、海士町の人口は減少傾向にある。

しかし、海士町創生総合戦略人口ビジョン(海士チャレンジプラン)の中で人口減少を 食い止めるため、出生率の増加と転出率の減少を目指しており、人口増加と人口構成のバ ランスの改善を図っている。



グラフ1 海士町の人口の移り変わり(平成27年度国勢調査,島根県人口移動調査)

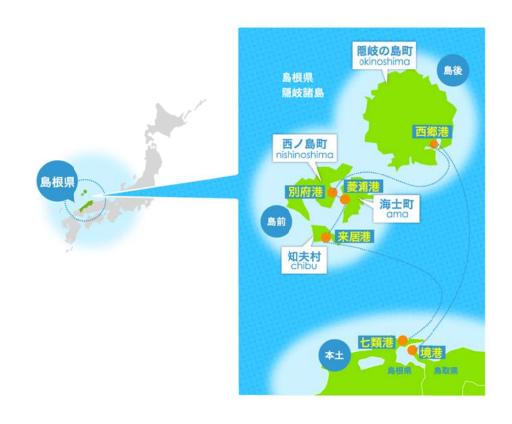


グラフ2 海士町年齢別人口(平成27年度国勢調査)

○海士町の交通状況

海士町と本土を結ぶ交通手段は、高速船1艇とフェリー3隻である。高速船を利用した場合は他の島を経由して2時間程度、フェリーを利用した場合は3時間程度の航海となる。 高速船とフェリーは季節変動があるものの、それぞれ海士町と本土間を1日2便体制で運航しており、島根県の七類港、または鳥取県の境港のどちらかにの港に着岸する。

海士町内は県道 317 号線及び町道、その他、細かな農道、林道、牧道が整備されており、住民の主な移動手段は自家用車である。公共交通機関は路線バスのみであり、島内の北側を巡回する豊田線と南側を巡回する海士島線が、自家用車を利用しない島民の生活を支えている。また、レンタカー事業者が島内に存在しないため、公共交通機関以外での交通は、タクシーを利用することとなる。



○海士町の気候

海士町は海洋性気候のため夏涼冬暖の気候である。気象庁のデータによると、2017年の海士町の年間平均気温は 15.2℃で、年間平均降水量は 141.9 mmとなっている。また、島根県の県庁所在地である松江市と比較した場合、平均最高気温が約2℃低く、平均最低気温は約2℃高い。これは、対馬暖流の影響を強く受けており、同緯度の他地域よりかなり温暖である。冬季の積雪量は、本土側の山陰や北陸地方に比べて少ないが、冬季は北西からの季節風が強いため、体感温度が低くなる。

表1海士町の気候(2017年気象庁データ)

月	平均気温(℃)	降水量(mm)	平均風速(m/s)	最高気温(℃)	最低気温(℃)
1月	5.9	83.5	2. 9	14. 4	-3.4
2 月	5. 9	160	2.6	15. 6	-2
3 月	7. 1	44. 5	2	16. 7	-1.9
4月	14	102.5	2.8	24. 3	0. 9
5 月	18. 7	22.5	2. 4	27. 7	5. 9
6 月	20	62. 5	1.9	29	10.3
7月	26. 7	74.5	2.3	34. 1	18. 4
8月	26. 5	140.5	1.8	34. 4	16. 6
9月	21.8	212	1.8	28. 4	11. 4
10 月	17. 4	199. 5	2. 1	27. 1	5
11 月	12. 2	79	2.7	21. 5	1.7
12 月	6. 5	121.5	3. 2	13. 9	-1

グラフ3海士町の気候(2017年気象庁データ)



2-2. 海士町の産業

現在の海士町は、藤原宮跡出土の木簡から海産物が中央政権に納められていたことや吾妻鏡に牧の記載があることから、古くからの半農半漁の形態が受け継がれてきたと考えられる。そのため現在も、第 1 次産業が主産業となっており、島内の食料自給率は高くなっている。特に米の自給率は高く 100%を超えており、2016 年には海士町のブランド米を開発し、特産品としてオンラインショップを通して広く販売されている。また、ブランド牛「島生まれ島育ち隠岐牛」やブランド養殖イワガキ「隠岐海士のいわがき・春香」といった特産品も生産されており、東京を中心に出荷する他、これらもオンラインショップから購入が可能となっている。農業と漁業の就業人口数はほぼ同数であり、いずれも高齢化による後継者不足が課題となっている。









「海士の本氣米」

「島生まれ島育ち隠岐牛」

「隠岐海士のいわがき・春香」

○農業

海士町には平地が多いため、古来より稲作が盛んである。米と野菜類が現代の代表的な農作物となっている。近年は農作物のブランド化推進のため積極的に取り組む農業者が増えている。隠岐牛の堆肥といわがき春香の牡蠣殻の肥料を使った土を使用したお米「海士の本氣米」が2016年より販売開始となった。崎地区で盛んであったみかん栽培を再生させる取り組み「崎みかん再生プロジェクト」は2013年(平成25年)より開始され、「崎みかん」の栽培面積を拡大しつつある。さらに、同プロジェクトでは梅の栽培から梅干しとして加工販売を行う6次産業の「蘇婆訶梅(そわかうめ)」の生産にも携わり、農作物のブランド化の一環として行われている。

農家数の推移(単位:戸、人、ha)

年次	曲点料		専兼業別農家数			経営耕地面積				
十八	農家数	人口	総数	専業	第1種兼業	第2種兼業	総数	田	畑	樹園地
昭和60年	380	1, 305	380	62	30	288	397	212	136	49
平成2年	297	1,017	297	34	33	230	199	132	47	20
平成7年	238	786	238	31	28	179	162	113	39	10
平成12年	201	684	132	18	10	104	147	106	33	8
平成17年	204	565	107	23	11	73	118	98	16	4
平成22年	166	230	70	18	2	50	114	92	19	3
平成27年	137	178	60	14	5	41	118	96	20	3

(平成27年度農林業センサス)

○畜産業

海士町の畜産の起源は定かではないが、鎌倉時代の歴史書である「吾妻鏡」に隠岐の牧について記載があるため、古くから牛馬が放牧されていたことがわかる。隠岐の在来種は、牛馬共に小型であり農耕用であったが、明治以降は畜産の目的が変化し、牛馬は食肉用としての生産が開始され、大型化されてきた。現代に入り、肉牛のブランド化を図るために海士町ならではの付加価値を高める必要があった。そのため、2004年(平成16年)より、牛の糞尿にチップ化した木材を混ぜ合わせて良質な堆肥を作り、その堆肥と島内の農家の稲わらとで物々交換を行う仕組みを作り、その稲わらを飼料として使うことで安全なものを食べていることを強みとして打ち出すことをはじめた。また、肉質にこだわるため、雌の未経産牛のみを肥育することとした。その結果、繁殖から肥育までを完全に島内で行った牛を「島生まれ島育ち隠岐牛」と呼び、A4からA5ランクのブランド牛として高い評価を受けることができるようになった。

○漁業・水産業

2013 年(平成 25 年)における海士町漁協管内の漁獲量は 396t で 2006 年(平成 18 年)の 798t に比べて半減しており、漁獲高も 6 割に落ち込んでいる。漁業種類別に見ると養殖と延縄は若干伸びている反面、一本釣り、定置網は半減している状況である。 2002 年(平成 14 年)から養殖いわがきを「隠岐海士のいわがき・春香」として販売開始し、ブランド化の推進を行うようになった。 2005 年(平成 17 年)からは細胞を壊さない冷凍装置(CAS)を使った水産加工品会社の創業、2008 年(平成 20 年)からは干しナマコの加工・販売にも取り組むなど、行政主導による漁業者の所得向上に尽力している。 その他、海藻に特化した研究・商品開発も積極的に行い、さらなる海士町ブランドの構築を目指している。

2-3 海士町の歴史

○縄文時代

海士町には縄文時代に食物を採取して生活する住民がいたことが、郡山遺跡などから明らかになっている。農耕の文化は無かったと考えられており、木や石の道具を使った漁猟民族だった。実際に、縄文時代の遺跡から出土した土器や石器から現在の海士町の一帯に縄文時代の住民がいたことが証明されている。郡山遺跡からは、黒曜石などの石器、石斧、石錘、石皿、磨石、勾玉など数多くの出土品が発見されており当時の生活様式がうかがえる。その他に、三田遺跡、北分遺跡などがあり、海士町では産出されない黒曜石も出土している。この黒曜石は隠岐の島町が産地であるが、地理的要因などにより、海士町がこの石の交易の中継地としての拠点となっていたことも出土品から推定される。

○弥生時代

この時代では、狩猟及び採取の生活から稲作りを行う文化へ移り変わったと考えられている。弥生時代の最大の遺跡は東地区の竹田遺跡である。弥生式の土器のみが出土し、縄文式や須恵器は混在していない。出雲王朝と同じ種類の銅剣が出土していることは大変重要である。この銅剣は、島根県指定文化財となっており、この島に古代より高度な文化が育まれていたことがわかる非常に重要な出土品となっている。

○古代

藤原宮跡(694年~710年)出土の木簡に隠岐国海士郡の名が記載されており、文字の記録として、これが最古のものであり中央政権との繋がりがあったことが分かる。延喜式の調(税)から、隠岐に課せられていたのは海産物であり、農業以外に水産業が発達していたことがわかる。隠岐は平安時代まで「御食国」と呼ばれ、当時から貴重であった鮑は干し鮑として中央に献上されていた。これは、江戸時代に栄えた北前船における流通品として、のちに長崎の俵物となる海産物の特産品の起源であったと言われている。干し鮑は後代まで宮中貴族の間に珍重されていたことが村上家と京都水瀬家との往復書状控からわかっており、古代から宮中においての隠岐の鮑は不動の名声を得ていたことが分かる。

7~8 世紀の海士町は、島根本土と大陸の中間地点に位置しているため、大陸側の新羅や 渤海と使節の交換が行われていた。しかし、時代と共に情勢は変化し、大陸側からの侵攻 に対する緊張と警戒を強め、異国船の恐怖にさらされていたと言われている。宇受賀命神 社は名神大社として創建されており、この島が国防上の重要な拠点であったことがうかが える。724 年(聖武天皇神亀元年)に隠岐は遠流の地に定められ、やがて、937 年(延長 5 年)完成の延喜式の刑部、判事、因獄の条では、流人配所の遠流の国として記載がされて おり、20 名を超える貴人が流されたとされる。

○中世

中世の隠岐の歴史は、佐々木一族の歴史でもある。1192年(建久3年)鎌倉幕府が成立 し、翌年に佐々木定網が隠岐一国の地頭職を拝領したことに始まり、広綱、晴清と権力者 が続く。1221年(承久3年)、後鳥羽上皇は承久の乱に敗れ、隠岐の国(海士町)に配流さ れることとなった。御配流された後鳥羽上皇は、海士町で19年間過ごされて崩御された。

○戦国時代

戦国時代の山陰は、尼子氏と毛利氏の攻防が繰り広げられていた。当時の隠岐は尼子氏の勢力内であったが、在地最大勢力の豪族である村上家は毛利方についていた。村上家は中世以前から続く家系で村上水軍の流れを汲んでいると言われており、住居に隣接する因屋城を居城としていた。この城の土塁及び外堀跡は現在まで保存されている。1566年(永禄9年)には、但馬但後の海賊(尼子方)が、因屋城を襲撃したが、村上一族は別府の近藤氏と力を合わせ防戦し、敵を敗走させ、島民の難を救ったと言われており、その功績により小早川隆景より書状を贈られている。また、鎌倉時代から毛利家と主従関係にあった渡辺家は、毛利元就が本家を相続した際の後継者争いに巻き込まれ、戦いを生き延びた渡邉美作守亮が重臣を頼って海士町で生き延びた。渡邉美作守亮は屋号を中良と称し、崎渡辺家の初代となり安永年間(1764年~1780年)には地区の有力者となったと言われている。

○近世

近世の隠岐は、北前船の西廻り航路の中間にあり、風待ちや避難港として菱浦港、日之津港、日須賀港が利用されていた。村上家は独自の航路を開拓し、遠くは京大阪まで広げた。村上家の功績により、水産物、林産物、豆類などが島外に移出され、この島外と海運業の取引により財を成した家柄は多いと村上家文書などの記録にもある。また、船員との交流も行われており、民謡「伊勢音頭」の文化も島外より伝わったとされている。他地域との交流が増加したことで漁猟にも変化があった。伝統漁法である「かなぎ漁」に加え、長崎から伝わった漁法「あま」を始め様々な漁法が行われるようになったとされている。

○近現代

隠岐諸島は1872年(明治5年)から所属が点々と変わりながら、1876年(明治9年)に 島根県となり現在に至っている。当時の海士町は江戸時代から続く8村に分かれており、 1904年(明治37年)に町村制が施行され、1郡1村の海士郡海士村となった。

1872 年 (明治 5 年) に海士郡での廃仏毀釈運動が豊田村から始まった。寺院と僧侶のどちらの存在も認めず、寺院はことごとく解体し仏像仏具も含めて焼いていたが、一部の仏像などは信者の手によって守られ難を逃れたと言われている。この史実により、多くの文化財が失われたと考えられる。

1895年(明治28年)には、隠岐汽船株式会社が設立しフェリーでの海上交通が始まった。

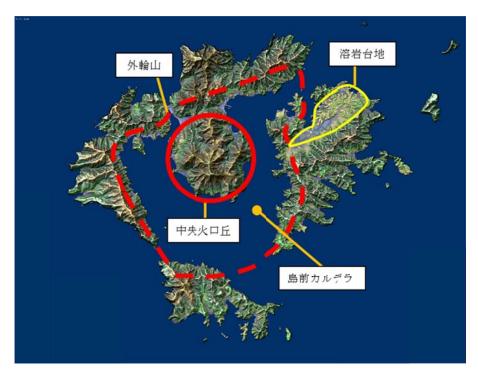
2-4 海士町の自然

○地質・地形

海士町は、西ノ島焼火山の位置を中央火口丘とする約 600 万年前の火山噴火の影響によりカルデラの外輪山の一部として誕生した島である。海士町にある山は低山のみであり、最高峰である家督山が 246mである。山地地形として、2 本の山脈が交差している。1 本目は島の東北から西南に縦走する山脈がある。この山脈は金光寺山、唯山、高峰山で構成されており、山脈の尾根は緩やかである。また、この山脈の西北部は平坦な水田地帯と丘陵が多くなっており、東南部は外海に面し平地に乏しく傾斜が急になっている。もう一本の山脈は、菱浦地区から崎地区にかけてのカルデラの外輪山の一部である。県道がこの尾根上を島の南北にわたり結ぶ幹線道となっている。

川は諏訪湾に注ぐ諏訪川、境川がある。これらは水量に乏しいものの、主に水田に用いられている。

地質としては、島の各地で噴出したアルカリ玄武岩や火山砕屑物が島の大部分を形成している。島の特徴的な岩石はアルカリカンラン石玄武岩と呼ばれ、宇受賀区、北分区、東区などの比較的平坦な地形を形成している。この玄武岩は西ノ島や知夫里島では見られない岩石である。豊田地区や明屋海岸周辺で見られる赤い台地は、火山砕屑物が堆積して形成されたものである。各所に起きた火山活動で粗面岩の地形も形成された。この粗面岩の岩脈は金光寺山、家督山、唯山、角山などで見られる。



島前カルデラ

○植物

海士町の本来の植生はスダジイやタブノキなどの照葉樹であったと考えられている。こ れは、南方系の植物で最終氷期が終わり、温暖な時代を迎えた約 1 万年前から九州地方以 南から移動してきたと言われている植物である。人の営みが盛んになるにつれ森林の形態 も様変わりしてきたと考えられる。海士町は隣の島前の 2 島と同様に牧畑が行われるよう になった。そのため、森林は切り開かれて耕作地へと変化していった。特に、島前地域3 島では火山による成り立ちの影響で、平地が少なく穀物などの栽培面積も限られていたた め、痩せた山地を利用する牧畑による農業が盛んに行われた。その結果、山地の大部分が 牧畑に利用され照葉樹林は伐採され、森林環境は脆弱なものとなっていった。そして、昭 和 50 年代から松くい虫の被害により、平成の時代に入るとほぼ全域のクロマツは枯損した。 その対策として、松枯れ跡地を中心に杉やヒノキを中心とした植林が現在も続いている。 放牧地にも人工林にもならずそのまま放置された山林では、パイオニア植物といわれる生 育の早いタイプのアカメガシワ、アブラギリ、ネムノキなどを中心としてコナラ、クマノ ミズキ、ノグルミなど多い植生の森林が再生してきている。また、実用品の製造のため従 来集落付近に植えられていた竹の仲間は、時代とともにその利用価値が失われ放置された 結果、人の生活と密着している地域の中で森林を駆逐するほど生育面積を急速に拡大し続 けている。このような変遷の結果、島本来の照葉樹林はほとんど姿を消し、隠岐神社周辺 に小さな面積の照葉樹の森が見られるのみとなっている。

現在の海士町の植生の特徴として、本来、南陽の海に生息するとされ、海藻類としては唯一生育地域が国の天然記念物に指定されている「クロキヅタ」や九州等の暖かい場所で生育する「ハマビワ」などの南方系植物、北海道等で生育する「エゾイタヤカエデ」などの北方系植物、ユーラシア大陸で生育する「マルバウマノスズクサ」などの大陸系植物の混生が見られる。明屋海岸付近では、町の天然記念物に指定されているセリ科の「タケシマシシウド」が自生している群落がある。これは国内では海士町でのみ生育が確認されている植物である。また、離島ならではの固有種であるオキタンポポ、オキノアザミ等が生育している。この様に、海士町は独特の植生を保っている地域である。

○動物

海士町は、何度も本土とつながったり離れたりを繰り返した地史を持つ島である。この地史が海士町の動物相に大きく影響している。ここで見られる動物はもともと本土に生息していたもので、隠岐諸島が本土と陸続きだった時代に隠岐諸島へ渡ってきたものが、約1万年前に本土から完全に切り離されたことにより、そのまま隔離されてしまったものと考えられる。

海士町には大型の哺乳類は生息していないのは、小形獣は隠岐諸島まで到達できたが、 半島の途中に大型獣の到達を阻んだ何かの障壁があったか、もしくは、渡ってきた小形獣 は生き残ることができたが大型獣は絶滅してしまったとの理由が考えられる。そのため、 現在の海士町最大の哺乳類は移入種の「チョウセンイタチ」である。

隔離されたことにより、飛翔できない地上徘徊性の昆虫「オキマイマイカブリ」や陸産 貝類「オキゴマガイ」などの固有種が数十種確認されている。近年の調査では、島後での み確認されていた陸産貝類の固有種「ヒメナミギセル」が豊田地区で発見された。

また海士町は渡り鳥の中継地であり、春と秋の渡りの季節になると様々な渡り鳥が通過していることが専門家の調査により明らかとなってきた。また、国の天然記念物「カラスバト」が町内各所に生息しており、生息北限地となっている。

○隠岐ユネスコ世界ジオパーク

ジオパークという言葉は、ジオ (geo:地球、大地)とパーク (park:公園、園地)を合わせた造語で、「大地の公園」といった意味をもつ、国際連合教育科学文化機関 (ユネスコ)の正式なプログラムである。世界遺産と同じ位置づけであり、国際的に価値のある地域や物件を指定し保全する仕組みの1つとされている。隠岐は2013年 (平成25年)に世界ジオパークに認定され、2015年 (平成27年)にジオパークがユネスコの支援するプログラムから正式なプログラムとなったため、隠岐ユネスコ世界ジオパークと名称が変更された。

隠岐ユネスコ世界ジオパークは、海士町(中ノ島)を含む 4 つの有人島と 180 余りの無人島からからなる隠岐諸島全域と海岸から 1 kmの海域及び島後水道を範囲としている。隠岐では、岩石だけでなく動植物や歴史文化などの複数の地域資源によってジオパークが構築されているのが特徴である。これら地域資源の表現として隠岐ユネスコ世界ジオパークでは「大地の成り立ち、独自の生態系、人の営み」という 3 つのテーマを用いており、隠岐諸島のそれぞれの島でこの 3 つのテーマが楽しめるようになっている。



隠岐ユネスコ世界ジオパークの範囲



隠岐ユネスコ世界ジオパークのテーマ

第3章 海士町の歴史文化の特徴

3-1. 海士町の歴史文化の特徴

海士町は、古くは縄文時代の黒曜石交易の中継地として存在し、律令時代以来の中央とは密接な交流を重ね、遠流の地としては、後鳥羽上皇を始めとした貴人達の来島をもてなし、北前船による交易の時代での華やかな活躍など、歴史の中で、幅広い交流により発展した独特な文化をもち、また、その基礎を築いたものは、離島という特殊な立地と火山噴火がもたらした大地の成り立ちによるもので、他にない非常に独自性のある文化が存在していることが大きな特徴である。

3-2. 海士町の指定文化財

海士町には指定文化財が 34 件あり、国指定 2 件、県指定 4 件、町指定 28 件である。

▼表 海士町の指定文化財の件数(平成30年3月現在)

種別		国指定	県指定	町指定	計
	建造物	_	_	3	3
	絵画	_	_	_	_
	彫刻	_	1	6	7
	工芸品		1	2	3
有形文化財	書跡	_	_	3	3
	典籍	_	_	_	_
	古文書			1	1
	考古資料		1		1
	歴史資料				_
₩₩.₩.₩.₩	工芸技術	-	l	1	_
無形文化財	芸能	_	_	_	_
日必去仏母	有形民俗文化財	_	_	_	_
民俗文化財	無形民俗文化財	_	1	3	4
	史跡	_	_	1	1
⇒1 A #/m	名勝	_	_	_	_
記念物	天然記念物	2	_	9	11
	名称及び天然記念物		_		
言	十(指定文化財)	2	4	28	34

3-3. 文化財の地域別聞き取り調査の方法と実施状況

海士町の歴史、文化を整理するため、平成28年度、29年度に「伝統文化・文化財調査シート」を作成し、町内全域の調査を実施した。

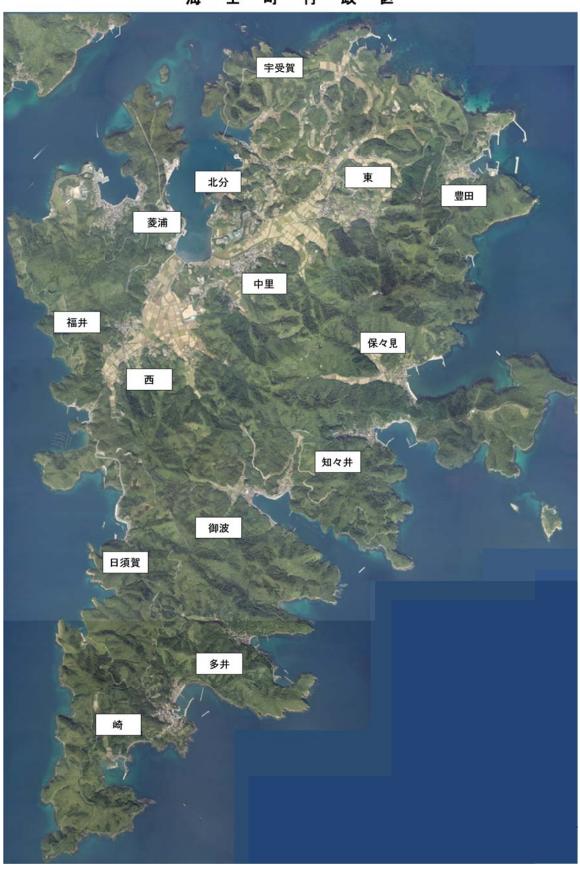
調査は、昭和49年に発行された「海士町史」を基礎とし、隠岐諸島4島の教育委員会が 共同編集を行っている地誌「隠岐の文化財」などの隠岐に関連する資料の情報を整理した。 また、各地区に残る指定、未指定にかかわらず、すべての文化財を把握し、記録するため、 次の5つの項目について有識者から聞き取り調査を実施した。

- ○海士町遺産の候補となる文化的資源について
- ○それらの所在あるいは開催場所
- ○特徴(信仰対象、活動内容、頻度)
- ○伝承者(取り仕切る方、詳細を知る方、団体名、個人名)
- ○その他

▼表 各地区の聞き取り調査実施状況一覧

地区	実施日	会場
菱浦	2017年(平成29年)1月23日	菱浦公民館
福井	2016年(平成28年)10月3日	海士町開発センター
西	2017年(平成29年)1月27日	村上さん宅
中里	2017年 (平成 29年) 1月17日	諏訪公民館
東	2016年(平成28年)10月12日	後鳥羽院資料館
北分	2016年(平成28年)10月7日	海士町開発センター
宇受賀	2016年(平成28年)10月4日	後鳥羽院資料館
豊田	2017年(平成29年)1月19日	豊田公民館
保々見	2017年(平成29年)1月19日	保々見公民館
知々井	2017年(平成29年)1月19日	森林組合和室
御波	2017年(平成29年)1月18日	濱谷さん宅
多井	2017年(平成29年)1月12日	多井公民館
崎	2017年 (平成 29年) 1月12日	崎公民館
日須賀	2016年(平成 28年)10月6日	海士町開発センター

海 士 町 行 政 区



3-4. 海士町遺産とは

海士町には、海士ならではの文化的資源が数多く存在している。しかし、文化的資源の中には従来の定義や分類で「文化財」として認識されず、歴史の流れや社会、生活の変化に伴って気が付けば喪失の危機に瀕しているものも数多く存在する。

そこで、本構想では文化財指定されている全34件と未指定の文化財及びその周辺の自然環境を総称して「海士町遺産」とし、それを幅広く掘り起こしリストにまとめた。

今回掘り起こした「海士町遺産」を「モノ」、「コト」、「ヒト」の3つに分類し、さらにその3種類を細分化した小分類により整理することで、海士町の歴史文化を特徴づけるものを明確にする。



海士町に現存する文化的に作り出された有形のもの(建築物、 工芸品、彫刻、書籍、古文書、考古遺跡)に加え、歴史文化に深 くかかわる自然を【モノ】として分類している。

【モノ】と分類することで、海士町遺産を整理し、有形のものと自然や民俗(行事など)をまとめてリスト化することで関連性を知ることができる。

建築物

神 社

1. 御倉神社

所在地:菱浦地区

祭 神:大国主命合祭:大己貴命

詳 細:1909年(明治42年)7月14日に家督神社を合併

行 事

・月次祭…毎月15日(島前の中でここのみ)

- ・元旦祭…午前 0 時に集まり祭典をする。当番組(4 組ごとに分かれて当番=お 世話を行う)があり、神社総代、区長、宮司、区民の参拝が行われ る。お供え物はお神酒、水、米、麦、餅、塩、海の幸、山(畑)の幸。 当日、直会はせずお神酒のみいただく。直会は別途、1 月中に総代・ 区長・宮司のみで行う。
- ・春祭り…2 月 27 日の午前 11 時より祭典のみ実施。
- ・秋祭り…11月23日御倉神社秋祭り(新嘗祭)の祭典のみ。11時から行う。
- ・例 祭…7月14日/15日 14日は17時より宵宮が開始される。7月15日が本 祭で10時に客神社で参拝後、11時より御倉神社で本祭が開始される。2 年に1回大祭が行われ、大祭では神輿・先祓い・後祓い・獅子・楽師(て びし・笛・太鼓)が行われる。



▲御倉神社(拝殿)



▲御倉神社(本殿)







▲左から先祓い、後祓い、獅子

2. 家督神社

所在地:福井

祭 神:大国主命

詳細:菱浦地区と福井地区の両区で管理している。「1909年 (明治42年)7月に御倉神社へ合祀したが、疫病が流行

したため、合祀の災いではないかとして合祀を廃止して

復元した。神社裏に寺院跡とみられる礎石がある。

行 事

・春祭り…4月20日の直近日曜に行う。 午前9時に公民館に 集合し、出発する。家督神社に到着すると、準備を して祭典に移る。そのあと、御供(ごく)を皆で頂 き、富くじ(景品付きのくじ)の抽選会を行う。 毎 年行うが福井地区と交代で当番をする。菱浦5年、 福井1年で交代していく。



▲家督社写真

3. 宮田神社

所在地:福井

祭 神:國常立神

祭 神:国之常立命、豊雲野神、宇比地通神、須比智通命、角杙神、活杙神、 意富斗能、地神、大斗乃弁神、淤母陀琉神、阿夜許志呂泥神、伊邪那岐神、

伊邪那美神

合 祭:天照大御神、忍穂耳命、瓊々杵命、火遠理命、鵜葺草葺不合命大国主命

詳細:神輿庫あり荒神社、庚申塔も同じ敷地内にある

- ・元旦祭…12月28日頃に地区で神社境内や庭の掃除、神社境内に飾るしめ縄を作り、飾る。元旦は朝9時頃に区民が参拝後、公民館で直会をする。
- ・例 祭…7月16日、17日祭り全体は氏子4名で取り仕切られる。 以前の道中 神楽は先祓いと後祓いの2人で実施されていたが、現在は先祓いが1 人で実施している。大祭りは道中神楽と神輿が行われる。 大祭は13年 ぶりに平成27年に行われた。



▲宮田神社(拝殿)



▲宮田神社(本殿)



▲左から先祓い、獅子

4. 健須佐雄神社

所在地:西地区

祭 神:武須佐之男命、素戔嗚尊 玉依比咩命 市杵嶋姫命

事解男命

詳細:西区日ノ津鎮座元村社渡神社、釜出の一の宮神社、

横手の新宮神社、西塔寺の健須佐雄神社を合祠し

た神社。

行 事

- ・元旦祭…午前 10 時より祭典が開始され、御神酒を頂き、 公民館で新年会を行う。
- ・秋祭り…11月25日の午前10時頃、神主、区長、総代 が集まり、祭典の後に御神酒を頂き解散する。



▲健須佐雄神社拝殿



▲健須佐雄神社(本殿)

5. 諏訪神社

所在地:中里地区

祭 神:建御名方命 合祭大山祇命 長津彦命

詳 細:健須佐雄神社と合祀。

- ・元旦祭…午前10時に諏訪神社で祭典が行われる。神社の賽銭箱の前で、海から 採ってきた海藻(モバ)を振って清めて拝む。その後、諏訪会館に移動 し直会が行われる。
- ・例 祭…開催時期:7月21日、22日。祭典が実施されたのちに直会が行われる。通常は神事のみが行われるが、5年に1度行われる大祭には、先祓い・先祓い・神輿・楽師(どう、小太鼓、てびし、笛)が出る。
- ・十日恵比須…1月10日に行う。



▲諏訪神社(拝殿)



▲諏訪神社(本殿)



▲左から先祓い、獅子

6. 推惠神社

所在地:中里地区 祭 神:小野尊俊霊

詳細:小野尊俊は在島中は源福寺に住んでおり、寺に位牌

を残した。(現在、位牌は保々見清水寺にあり。)

「推恵さん」と呼ばれていた。しろみてという田植え の終りの日を定め、これを推恵さんの祭りの日とし、

村民が大勢集まって神楽を奉納する行事があった。

行 事:なし



▲推恵神社

7. 隱岐神社 【海士町指定文化財】

所在地:東地区

祭 神:後鳥羽天皇

詳細:昭和14年、天皇没後700年祭を記念して御火葬塚の隣接地に造営されま

した。社殿は独特の隠岐造りである。毎年4月14日と10月14日に例祭

が行われている。

- ・春祭り…4月14日。神主の祭典後、地域の子どもたちが舞姫となって承久神楽を 奉納する。
- ・秋祭り…10月14日。例祭では春祭りと同じように執り行うが、5年に1度例大祭があり、その際には道中神楽と神輿がでる。午後神輿渡御があり、隠岐神社から御火葬塚までくだる。御火葬塚の鳥居をくぐった所で承久神楽を舞うなど、神事をおこなう。神輿を担ぐのは上方と海士方が交代で行っており、担ぎ手は白装でしずしずと神輿を担ぐ。



▲隠岐神社(拝殿)



▲隠岐神社(本殿)



▲御火葬塚にて承久神楽奉納





▲左から先祓い、獅子

8. 東神社

所在地:東地区

祭 神:素戔嗚命 須佐能男命 管函相

詳 細:大眸神社と元平山の海士(妙見)乃東神社と元苅田の高田神社の3社を合

祀したもの。合祀は明治42年7月20日。

行 事

・例 祭…7月20日、21日。祭典が実施されたのちに直会が行われる。通常 は神事のみが行われるが、4年に1度大祭を行う。道中神楽(先祓 い、後祓い、獅子舞、楽師、神輿)が行われる。



▲東神社 (拝殿)



▲東神社 (本殿)





▲左から先祓い、獅子

9. 北乃惣神社

所在地:北分地区

祭 神:大穴牟遅命、須佐能男命、菊理媛命

詳 細:海士町史には「北乃総神社」と記載。北分大津鎮座惣神社、客の海士乃神社、吉津の白山神社を合祀したもの。惣神社は大穴牟遅命、海士乃神社は須佐能男命、白山神社は菊理媛命を祭神としており、明治42年7月13日の合祀には惣神社社地に合併し社名を双方から採って北乃総神社と改称。

- ・元旦祭…歳旦祭と呼ばれており、北乃惣神社で参拝した後、境内で直会が行われる。
- ・春祭り…2月役員のみで行われる。
- ・例 祭…7月13日、14日。1日目を出遷宮(でせんぐう)、2日目を入遷宮 (いりせんぐう)と呼び、4年に1度の大祭りでは道中神楽に先祓い、 後祓いがあり、神輿が出る。 他地区の道中神楽は島前神楽の影響 を受けた白い獅子と天狗の絡みがある舞だが、北分地区の道中神楽

は天狗と獅子が同時に個々の舞を行うという昔から受け継がれた形式である。

・秋祭り…12月役員のみで行われる。











▲北乃惣神社(拝殿)

▲北乃惣神社(本殿)

▲左から先祓い、後祓い、獅子

10. 字受賀命神社【海士町指定文化財】

所在地:字受賀地区 祭 神:字受賀命

詳細: 続日本後記や、延喜式などにも載禄されている古格の神社である。大正 4年に本殿が燃えてしまい、文書郡が燃えてしまったといわれているが、 火災を免れた大般若経は町指定有形文化財に指定されている。

- ・宇受賀命神社のあご石神事【町指定無形民俗文化財】
- ・元旦祭…歳旦祭と呼ばれており、宇受賀命神社に参拝した方に、お供えした おもちを切って振舞うが、男性のみで女性には振舞わない習慣とな っている。
- ・例 祭…7月10日、14日に開催する。7月10日は「夜(ヨ)まつり」が行われる。7月14日は御供え物(米、玄米、酒、餅2つ、魚、サザエ、昆布、野菜、果物、塩、水、まき(村尾家より)、ビール(かつては麦酒を作って供えていた)をお供えし、祝詞を読んだ後、浦安の舞を奉納する。玉串をし、お供えを下す。宮司挨拶があり、直会が行われる。お供えのおもちを参拝者全員にいきわたるよう切り分ける。4年に1度(を予定している)には大祭りがあり、神輿と道中神楽が行われる。



▲宇受賀命神社(拝殿)



▲宇受賀命神社(本殿)

11. 奈伎良比売神社

所在地:豊田地区

祭 神: 奈伎良比売命

詳細:延喜式神名帳にも載録され、隠岐国神名帳に

従一位柳井姫大明神とある古社

行 事

- ・元旦祭…午前8時から御崎神社、大歳神社、奈伎 良比売神社と順番で神事を行い、奈伎良 比売神社拝殿で直会が行われる。その後、 公民館に移り合同年始会が始まる。
- ・例 祭…7月5日に開催。9:00頃御碕神社で総代、 区長、黒住教神主でお参りし、9:30頃に 大歳神社でお参りしてから、奈伎良比売 神社で祭典が行われる。区民は奈伎良比 売神社から参加し、拝殿で直会が行われ る。大祭は平成13年より行われていな い。もともと他地区のように4年に1 回行う等とは決まりがなく、その年の 世話焼きさんによって決まる。大祭のと きは先祓い、獅子、楽師がでていた。



▲奈伎良比売神社(拝殿)



▲奈伎良比売神社(本殿)

備考

・豊田には三保神社があり、えびすさんと呼ばれる。美保神社には旧暦 3 月 3 日にホーラエンヤと呼ばれる春まつりがあった。これは、他地区の十日恵比須とは異なる。信仰対象はえびすさん(美保神社)で、かつては 2 年に 1 回行っていたが、若者の減少により平成 21 年に行ったのが最後となる。平成 27 年に復活させようとしたが天候不良により中止となった。 化粧をした船方が 12 人、楽師(先祓い、獅子、大太鼓、小太鼓、てびし、笛)12 人の合計 24 人ほどで行う。神様を神輿に乗せ、海上渡航を行うが、神輿を船に乗せるのは、神様に漁師の状況や海の状況を見ていただく為だといわれる。

12. 穗々見神社

所在地:豊田地区 奈伎良比売神社境内

祭 神:素戔嗚命

詳細:当国神名帳に従四位上穂々見明神とあり。

行 事

・元旦祭…祭典は午前9時から穂々美神社で祭典が行われる。現在は行われて

いないが、祭典後に集合年始を公民館で行っていた。以前の神主さんは上方の地区の元旦祭を任されていたため、保々見は早朝5時から祭典が行われていた。祭典後、区民は一度家に戻り、隠岐神社などに参拝していた。

・例 祭…7月19日、20日に行う。道中神楽(先祓い・獅子・太鼓・手びし・笛)が行われ、神輿がでる。平成28年度に初めて笛が導入された。 以前の大祭りは2年に1度(間の1年は知々井神社例大祭)行っていた。その頃は、保々見・知々井地区の子どもによる奉納相撲が祭りで行われていた。その後、3年に1度(1、2年目例大祭/3年目は保々見・知々井地区の合同運動会)に変更され、現在は4年に1度となっている。



▲穂々見神社(拝殿)



▲穂々見神社(本殿)





▲左から先祓い、獅子

13. 能野神社

所在地:保々見区・知々井区

詳細:保々見地区の代官屋が漁に出ていた時に、神谷島に流れ着いた社とご神体を拾う。それらを家に祀っていたが、ある時管理が難しくなり、知々井の親族の家に預けた。しかし、また管理が難しくなったために区に預け、現在に至る。祠はまだ代官屋の家にあるのではないかと思われる。毎年新暦1月3日、漁師は熊野神社へ参拝をしていたが現在はやっていない。(毎年十日恵比須と二十八講で参拝するようになったため)



▲熊野神社

行 事

・例 祭…旧暦8月13日、2年に1度、漁師を中心に保々見と知々井が交代で世 話役(区の役員)を担い神主によるご祈祷を行う。平成29年度は保々見 区担当の年。

14. 北野神社

所在地:知々井地区

祭 神:菅原道真、早玉男命

詳細:早玉男命は知々井崎字能野山に鎮座熊野神社と称し明治45年3月13日に

合祀。

行 事

・元旦祭…北野神社で元旦祭(お参り等)を済ませた後は、年始会を公民館にて行 う。以前は、夜明け前の4時~6時頃に元旦祭を始め、その後恵比須 さんの祠に拝みに行った際に、海の幸(するめイカ)と山の幸(大根)をお 供えしていた。その後、各自親しい者同士が家で集まっていた。

・例祭…7月25日に行う。かつて毎年大祭りを行っていたが、人口減少によって祭りの人手不足が生じたため、保々見地区と連携し1年目は保々見の例大祭、2年目は知々井の例大祭、3年目は保々見地区と知々井地区の合同運動会を行っていた。時代の経過につれて保々見と連携が取れなくなってきたために現在は3年に1度となっている。



▲北野神社(拝殿)



▲北野神社(本殿)







▲左から先祓い、後祓い、獅子

15. 奈須神社

所在地:御波 太井 祭 神:奈須比古命

詳 細: 行 事

> ・元旦祭…神社で神事を行い、御波地区の新年会を 午前10時から公民館にて行う。廃仏毀 釈以前は、元日に拝む順番があった。太 井では、奈須神社から光明寺→墓→家と いう順番で拝みに行く、挨拶する順番が あった。

・例 祭…7月14日祭典後に直会が実施される。



▲奈須神社(拝殿)

大祭りは実施されない。また太井、布施には神輿は無い。午前に那須神社、 午後に布施神社のように1日で祭典を終わらせていた時期もあった。

16. 布施神社

所在地:御波 布施

祭 神:稲倉魂命、大己貴命、大田命、大宮女命、 保食命、誉田皇命、和多津見命

詳細:布施稲荷神社、布施神社、字今浦の渡神 社を明治42年12月13日に合祀したもの。 布施稲荷神社には稲倉魂命大己貴命・大田 命・大宮媛命・保食命が、布施神社には 誉田皇命が、渡神社には和多津見命をそれ ぞれ鎮座している。布施神社の近くにお地 蔵さんや石塔あり。石塔は、手習いの子ど もたちが、先生だったお坊さんのために建 てたお墓と、もう一つの石塔は船が沈んだ 布施の悲劇についての石塔である。

行 事

- ・元旦祭…神社で神事を行い、御波地区の新年会を午前10時から公民館にて行う。
- ・例 祭…7月14日祭典後に直会が実施される。 大祭りは実施されない。また太井、布 施には神輿は無い。午前に那須神社、 午後に布施神社のように1日で祭典を 終わらせていた時期もあった。



▲奈須神社(本殿)



▲布施神社(拝殿)



▲布施神社(本殿)

17. 多井神社

所在地:多井地区 祭 神:素戔嗚命

詳 細:神社右側にある社殿は昭和14年頃まで本殿だった。隠岐神社社殿を作った宮大工さんが多井に泊っていて、お世話になったからと余った材で本殿を作ってくれて、それまでのものを右に移したと小中さんは言われていた。

行 事

- ・元旦祭…集合年始(新年会)のあと、公民館で直会が行われる。
- ・例 祭…7月10日に行う。現在は祭典のみ実施され直会は行わない。







▲多井神社(本殿)



▲例祭の様子

18. 三穂神社

所在地:崎地区

祭 神:事代主命 表筒男命 底筒男命 中筒男命 蛭子命

詳細:美穂神社参籠舎は、後鳥羽上皇が海士に来島した 初日に宿泊したと言われている。御神体は真っ白 な大きな石が3つあるそう。(最初は小さかった のに大きくなったといわれている。)神社改築の 際に見られた方がいる。



- ・元旦祭…三穂神社にてお参りをした後、公民館(文 化センター)にて直会。昔は公民館で直会 あ行われず、各家を周り飲食していた。
- ・例 祭…7月9日に行う。毎年行われ、区の役員と信仰のある区民のみで行う。 道中神楽は行われず、神事のあと公民館で直会が行われる。以前の祭りの日は、出店などが出ていたり、同じ地区(崎)や他地区に住んでいる親せきなどを呼んで料理がふるまわれた。



▲三穂神社(拝殿)



▲三穂神社(本殿)

19. 日御碕神社

所在地:日須賀地区

祭 神:天照大御神·速須佐男·天忍穂耳命

天津日子根命・天穂日命・活津日子根命 野久須毘命・多紀理毘売命・市杵嶋比女命



▲日御碕神社(拝殿)

多岐都比古命

詳細: 三穂神社に合祀された。

行 事

- ・元旦祭…神社にお供えをして、神主に祝詞をあげて もらい公民館で直会をする。
- ・例 祭…1月10日直近の日曜日に行う。



▲日御碕神社(本殿)

建築物

寺

1. 西方寺

所在地:菱浦地区 宗 派:浄土宗 本 尊:阿弥陀如来

詳 細:昔の清楽寺。慶長2年(1597:桃山) に 孁玄上人の建立。明治期檀家数30。明治2 年(1869)5月28日、6月6日の2回に 渡る海士知夫両郡の廃仏毀釈により廃寺と なり明治13年現在の場所に再興。昭和13



▲西方寺

年4月20日「西方寺」と改める。寺号を石見の廃寺から買った。廃仏毀 釈から逃れた江戸期の阿弥陀如来が西方寺に引き継がれ本尊となる。本 尊のほかに白布に包まれた一木造りの仏像一体を含むいくつかが御堂か ら発掘されて収められている。一体のみなので文化財指定されていな い。(島前の文化財掲載)昭和13年にお大師順路の最終地点となってい る。西方寺には道中の2体が納められている。

2. 安國寺

所在地:西地区 宗 派:東寺真言宗

本 尊:観世音菩薩 弘法大師

詳 細:山号は富春山。明治2年に廃仏の厄に遭い、

明治23年2月14日再興。施餓鬼(せがき)

を年2、3回ほど檀家さんが行っている。 行 事



▲安國寺

・お大師さん…お大師さん(空海)の祥月命日である旧暦3月21日に行う。

3. 源福寺

所在地:中里地区

宗 派:高野山真言宗 本 尊:胎蔵界大日如来

詳 細:山号は勝田山。脇立は不動明王と毘沙門天。

廃仏毀釈で廃寺となり明治23年2月再興。

行 事

・お大師さん…(空海)の祥月命日である旧暦 3 月 21 日に行う。



▲源福寺

4. 正源寺

所在地:東地区 宗 派:真言宗

本 尊:阿弥陀如来

詳 細:明治2年廃仏毀釈により、寺財は村に納め 諸堂は焼却。住職は帰農した。蓮光寺を改 め、正源寺として明治20年6月18日に再 興。現在、東神社向かって左、海士交通裏 にあり隠岐国における真宗の発祥の寺と言

われている。

行 事:なし



▲正源寺

5. 西明寺

所在地:東地区 宗 派:浄土宗 本 尊:阿弥陀如来

詳 細:山号は慶照山。直属本山は総本山 知恩院 。

建立は正徳5年。開山僧名は頓与説順和尚。

明治21年に再興。



▲西明寺

行 事:

・灌仏会(カンブツエ)…釈迦の誕生(旧暦4月8日)を祝い、九頭の竜が天から甘いお水 (甘露)を吐いて釈迦のはじめてのお風呂(産湯)にしたという 伝説より、甘茶を仏像にかける他に、お坊さんの話を聞いたり甘 茶を飲んだりする行事。

6. 金光寺

所在地:東地区

宗 派:真言宗 国分寺派

本 尊:大日如来

詳 細:山号は松尾山。脇立あり。小野篁が刻んだと伝えられ

る木像あり。縁起書によれば、小野篁が建てたと言わ

れている。

行 事

・お大師さん…(空海)の祥月命日である旧暦3月21日に行う。



▲金光寺

7. 教 海寺

所在地:北分地区 宗 派:真言宗 本 尊:大日如来

詳 細:【町指定文化財】教海寺流仏12躰が納められている。 区民からは「津ノ山(津能山)」という愛称で古くから呼 ばれ親しまれている。海士町史には「教開寺」と記載。 現在、管理は西明寺、掃除などの世話は北分区長が行っ ている。



▲教海寺

行 事

- ・お大師さん…(空海)の祥月命日である旧暦3月21日に行う。
- ・津ノ(能)山盆…8 月 18 日に、うら盆とは異なる独自のものが毎年行われる。毎年、 組(10名前後)で行う。その日のみ、教海寺の指定文化財である流 仏 12 躰が公開される。参拝、説法、昼食をとった後、境内にて輪 になって盆踊りをする。

8. 清水寺

所在地:保々見地区 宗 派:東寺真言宗 本 尊:観世音菩薩

詳細: 山号は大夫山。明治24年4月9日再興。現存の観音世音菩薩像は廃仏の厄を免れた明治2年の廃仏毀釈の際に本堂と仏像等は火難に遭うが、現存の本尊の観世音菩薩像は当時保々見若林常松の信仰によって自家に隠され厄を免れた。現在の清水寺は、西ノ島にある長福寺の建物を戦後に保々見に移築したもの。



▲清水寺

行 事

・お大師さん…(空海)の祥月命日である旧暦3月21日に行う。

9. 蓮生寺

所在地:御波 宗 派:真宗

本 尊:阿弥陀如来

詳 細:廃仏毀釈により、光明寺、宝光寺、

長福寺を失う。区に寺は必要だと 言う意向があり、明治33年12月 23日に安濃郡大田町より移転した。

行 事:なし



▲蓮正寺

10. 阿弥陀堂

所在地:多井地区

宗 派:

本 尊:阿弥陀如来

詳 細:中良家の文書より阿弥陀堂は江戸時代

の頃に焼けたことが分かる。その際阿 弥陀さんは火事から助け出したことが 記載されている。その際助け出された といわれる、阿弥陀様がおられる。元

は現在の公民館の位置にあったが火災

して今現在の位置に移転した。



▲阿弥陀堂

行 事

・お大師さん…空海の祥月命日である旧暦3月21日に行う。

11. 建興寺

所在地:崎地区 宗 派:天台宗

本 尊:

詳細:建興寺は行者堂とも呼ばれる。廃仏毀釈に

より西ノ島・別府にあった寺が海士・崎へ 逃れてきた。そのため建築様式は神社のも のに似ている。御神体は誰も見たことがな い。渡辺(中良)家が、建興寺を別府村か



▲建興寺(拝殿)

ら崎村に移転したといわれている。拝殿の 後ろに大社造風の建物があり、まるで神社 のような作りとなっているが、青谷にあっ た「西宮」という神社を移築したためそう なったと言われている。境内に中良家の墓 や、庚申塚の塔も残る。建物は残っている。



▲建興寺(本殿)

12. 願誓寺

所在地:崎地区 宗 派:天台宗

本 尊:阿弥陀如来

詳 細:山号は日照山。寺号は島根県安濃郡吉永村願

誓寺を移転以来のものである。下の方にある 寺で「下寺(したんてら)」と呼ばれている。



▲願誓寺

13. 法久寺

所在地:崎地区 宗 派:日蓮宗

本 尊:妙法五字釈迦多宝二仏

詳 細:山号は日照山。寺号は島根県安濃郡吉永村 願誓寺を移転以来のものである。上の方に ある寺で「空寺(そらんてら)」と呼ばれて

> 1つは、元々から法久寺にあった仏像で、 塗装が剥げていたりしたため檀家で費用を募 り修復した。崎区長が修復の際の写真を持っ ている。修復に際し分解した時、中には江戸

いる。本堂には仏像3体が安置されている。



▲法久寺

時代と表記してあったという。元は現在の本堂の敷地内に釈迦堂がありそこに安置されていたが、昭和になって本堂へ移した。

2つめは、中良家の人が朝鮮に渡っており、その際持ち帰ったと言われている。もともと中良家は浄土宗であるが、持ち帰った像はお釈迦様(日蓮宗)だった為この法久寺(そらんてら)へ預けたと思われる。仏像の中にはハングル文字と思われるものがあるがボロボロになって読めない。

3つめは、西ノ島より移したものである。日蓮宗は島後に1か所、知夫村に1か所、海士町に2ヶ所(東地区と崎地区)、西ノ島町に1か所あったが、西ノ島町の檀家さんが3名しかおらず、かつ高齢で存続が難しいということで近年になって崎へ運んできたものである。

建築物

古民家

1. 村上助九郎邸【海士町指定文化財】

所在地:中里地区

建築日:明治33年(1900)

詳細:村上家は中世以来、海士地域の有力者として

の活動が確認でき、隠岐に配流された後鳥羽 上皇の世話をしたと伝えられる隠岐を代表す る旧家のひとつ。古文書が数多く残り、平成 26年3月に資料館として開館し資料を公開し ている。村上家の歴史に限らず、この地域に 暮らした過去の人々の営みや当時の社会のあ





2. 村尾家

所在地: 宇受賀地区 建築日: 安政7年(1860)

詳 細:村尾家は村上家と並び、中世以来海士地域の有力者としての活動が確認でき

る。また、宇受賀命神社の神主を務められてきた家柄で、古文書が数多く残る。

建築物

庚申塔

庚申信仰と庚申塔

庚申信仰は中国の道教の教えに基づくもので、人間の体の中には人に大害を及ぼすという三尸(サンシ)と呼ばれる虫がおり、六十日に一度来る庚申の日の夜、人が寝ている間に虫が体から抜け出し、天帝(帝釈天)にその人の罪過を告げに行き、天帝はその罪状に応じてその人の寿命を縮めてしまうと考えられている。

そこで長生を願う場合、三尸が体から抜け出して罪を告げに行かないよう寝ずに 起きているようにという道教の教えから、庚申の日の夜は講員が集まって飲食や談 笑をしながら寝ずに夜を明かす習わしがあり、それを「庚申待」と言う。また、そ れらを一緒に行う共同体のことを「庚申講」と呼ぶ。

「庚申待」のやり方を述べた『庚申縁起』には、夜を徹して行う「庚申待」を年 六回、三年連続で計十八回やることを一座といい、一座が終わった場合には供養を して塚をつき、塔婆を建てることを「申上げ」と呼ぶとある。「庚申待」や「申上 げ」は、その名の通り庚申日に行われるのが原則で、庚申日は二ヶ月に一回の割合 で廻ってくるため年六回行わている。海士町では現在4か所のみ信仰が続いている が、庚申塔は各地区に残っている。

1. 菱浦地区(写真 1)

所在地:信栄堂裏。川に面する。

地 番: 隠岐郡海士町大字福井 963 番地 4

紀年銘:嘉永五壬子年六月吉日

彫 字:庚申塚 願 主:当村中

世話人:山岡屋慶八、魚屋亀三郎

船中世話人:北分奈多屋

大きさ:高さ150 cm×幅27 cm

特 徴:角柱、方錐形、基壇は三段、方位は北。



写真1

2. 福井地区(写真 2)

所在地:福井地区宮田神社境内。

拝殿横にある。

地 番: 隱岐郡海士町大字福井 281 番地

紀年銘:なし 彫 字: 庚申塚

大きさ:高さ107 cm×幅30 cm

特 徴:自然石・基壇なし

元々福井・菱浦間の旧道福井入り口にあったものの ようであるが、現在宮田神社の本殿の裏にある。 この神を祀ると学問が出来ると言われている。



写真2

3. 西地区(写真 3)

所在地:西地区西塔寺集落道路に面する。 地 番: 隠岐郡海士町大字海士 194 番地 1

紀年銘:明治□□□□

彫 字:庚申塚

願 主:西塔地谷中

大きさ:高さ115 cm×幅28 cm

特 徴:角柱、方錐形。台は2段。上部に日・月輪を陽刻し、 一猿一鶏(雄)を下部に浮彫している。行政上のかつて の字名は西塔寺であるので、願主の西塔地は寺の誤り

と言える。



写真3

4. 西地区(写真 4)

所在地: 健須佐雄神社境内。拝殿に向かって右側の境内奥にある。

地 番:隠岐郡海士町大字海士 5970 番地

紀年銘:なし

彫 刻:青面金剛像

願 主:なし

大きさ:高さ50 cm×幅23 cm

特 徴:一面六臂・右手に三鈷戟・利剣、矢を持ち左手に輪(縦)弓

索を持つ。邪鬼を踏み、石造厨子(ずし)内に立つ。半肉彫である。この塔は当初からここにあったのではなく、いつの頃からか他の二基とともに移転となったもののようで

ある。



写真 4

5. 西地区(写真 5)

所在地:健須佐雄神社境内。拝殿に向かって

右側の境内奥にある。

地 番: 隠岐郡海士町大字海士 5970 番地

紀年銘:なし

彫 刻:青面金剛像

願 主:なし

大きさ:高さ40 cm×幅20 cm

特 徴:一面方臂・右手に三鈷戟・利剣、矢を持ち左手に輪(縦)

弓・索(なわ)を持つ。三猿を添えた半肉彫である。



写真5

6. 西地区(写真 6)

所在地:健須佐雄神社境内。拝殿に向かって

右側の境内奥にある。

地 番:隠岐郡海士町大字海士 5970 番地

紀年銘:なし

彫刻:正面に三猿を刻んでいる。

願 主:なし

大きさ:高さ15 cm×幅25 cm

特 徴:基壇のみ。塔身の所在不明。



写真6

7. 西地区(写真 7)

所在地:島前霊場第七十二番礼所海士町日之津天原堂の横、日ノ津

に下る左側の上に立っている。

地 番: 隠岐郡海士町大字海士 6385 番地

紀年銘:なし 彫 字:庚申日 願 主:なし

大きさ:高さ125 cm×幅(下部)40 cm

特 徴:自然石の塔である。庚申日と浅く印刻したもの。庚申日と

記す例は島前では珍しい。基壇1段。



写真 7

8. 中里地区(写真 8)

所在地: 今井

地 番:隠岐郡海士町大字海士 1201 番地 1

紀年銘:なし 彫 字:庚申 願 主:なし

大きさ:高さ107 cm×幅40 cm

特 徴:基壇は一段。自然石。大きく日輪と瑞雲を塔身の やや上部に陽刻し、さらに、日輪に青面金剛の通種 子ウーンを陰刻している。今井では平成二十八年十 二月四日(申の日)に10年ぶりに新しい塔婆を建て お坊さんを呼び供養を行った。平成二十九年十二月 には講員達で費用を工面し台座を強化するためコン クリート整備が行われた。



写真8

9. 中里地区(写真 9)

所在地:御神尻

地 番: 隠岐郡海士町大字海士 1599 番地

紀年銘:なし 彫 字:庚申 願 主:なし

大きさ:高さ120 cm×幅65 cm

特 徴:基壇は一段。自然石。上部に青面金剛の通種子ウーン を陰刻しているこの塔は石の台から外れている。碑のほ ぞの欠落のためらしい。右に大山祇命の祠が茂る。御 神尻では四年に一度、御神酒を供えて供養する。



写真 9

10. 中里地区(写真 10)

所在地:里口

地 番:隠岐郡海士町大字海士 1705 番地 1

紀年銘:天保四年巳十一月

形 字: 庚申願 主: 講中石 工: 伊八

大きさ:高さ120 cm×幅65 cm

特 徴:角柱。方錐形。日・月輪・瑞雲を陽刻し、その下に 青面金剛の通種子ウーンを陰刻。基壇は2段。上段 に三猿と雌雄鶏を美しく浮彫している。四年に一度お

坊さんを呼び供養をする。



写真 10

11. 東地区(写真 11)

所在地:田畑邸内

地 番: 隠岐郡海士町大字海士 2764 番地 1

紀年銘:なし(推定昭和51年)

彫 字: 庚申塔

願 主: 銘はないが田畑十次郎氏(元海士町長)個人の造塔である。

塔は青みを帯びた花崗岩で大きいが塔に比べ彫字は小さい。

大きさ:高さ130 cm×幅92 cm

特 徴:自然石。頂部がとがる。簸川産。コンクリート製台



写真 11

12. 東地区(写真 12)

所在地:松原邸には見当たらず14番の尾崎に移動している。

道路に面する。

地 番: 隠岐郡海士町大字海士 2787 番地

紀年銘:なし 彫 字:庚申塔 願 主:なし

大きさ:高さ114 cm×幅 40 cm

特 徴:頂部がとがる。『島前の文化財』第8号によると、

現在の隠岐神社界隈に吉田口という里があり、こ

写真 12

の塔は吉田口にあった 13 軒の住民により造立された。昭和 14 年に隠岐神社が創建されるため吉田口の住民は各地区に移転し、この庚申塔は田畑氏と共に東へと移転されたが、同氏の新庚申塔造立のこともありさらに近くの松原増煕邸内に再移転となったことが記されている。その後どのような経緯があ

ったかは定かではないが、松原増煕邸内にあった庚申塔は同地区内の尾崎へ 移動となったのではないか。吉田口の過去には二年に一回十一月に「もうし ぎょう」という庚申待が講屋(田畑家)で行われたという。

13. 東地区(写真 13)

所在地: 金光寺旧道入口

地 番: 隠岐郡海士町大字海士 2722 番地

紀年銘:天保九戌十一月

彫 字: 庚申 願 主: なし 石 工: 伊八

大きさ:高さ113 cm×幅24 cm

特 徴:角柱、方錐形。基壇は2段。二段目右側に一猿一鶏を刻んでいる。青面金剛の通種子ウーンを陰刻。区上口の金光寺入口右側にこの塔が立つ。ここには新四国八十八ヶ所、四国三十三番霊場碑もたち、五輪塔の瑞・火輪や宝篋印塔の笠が無造作に寄せられている。正月には注連縄を飾るが、小正月(旧暦の正

月十五日)におろして焚くという。



写真 13

14. 東地区(写真 14)

所在地:尾崎

地 番: 隱岐郡海士町大字海士 2787 番地

紀年銘:文政十五年辰三月

彫刻:青面金剛像

願 主:小谷□□外十二人 大きさ:高さ57 cm×幅24 cm

特 徴:青面金剛で邪鬼を踏む。半肉彫。庇の正面に、日・月 輪・瑞雲を彫り出す。一面四臂、右手に三鈷戟、矢を

> 持ち、左手に輪(縦)と弓を持つ。左右に童女を伴う。 雄雌鶏上位に、三猿を会下位に刻む。相毀損のこの像 は石造厨子の中になる。現在の所在地番は 2787 番地 (尾崎)であるが、元々これは、少し離れた国保海士療

所の辺りに立っていた。



写真 14

15. 北分(写真 15)

所在地:大津

地 番: 隠岐郡海士町大字海士 4423 番地 2

紀年銘:天保十三年寅十一月

形 字: 庚申祭願 主: 当里中石 工: 角三

大きさ:高さ150 cm×幅27 cm

特 徴:角柱、方錐形。上部に日・月輪・瑞雲を陽刻し、下部 に一猿一鶏(雄)を対等に刻む。庚申塔は北分地区に1点 あるが、昔から行われていない。基壇は2段。上段を 亀張に造る。この塔は、もと北分の氏神社にあったが いつのころからか近くの字長田の町道添いに下された。





写真 15

16. 宇受賀(写真 16)

所在地: 豊子入口

地 番: 隱岐郡海士町大字字受賀 75 番地 1

紀年銘:なし 彫 字:庚申

願 主:女連中(燈籠に刻む) 看 主:春龍(燈籠に刻む) 願 主:若連中(燈籠に刻む) 世話人:仲上□平(燈籠に刻む) 大きさ:高さ113 cm×幅24 cm

特 徴:角柱、方錐形。上部に日・月輪・瑞雲を陽刻し、下部に

一猿一鶏(雄)を対等に刻む。基壇は2段。上段を亀張に造る。この塔は、道を挟んで反対側にあったが、道路改

修と同時に現在の場所へ移転した。石燈籠は二つあり、その一つに女連中、看 主春龍が刻まれ、もう一つに若連中、世話人が刻まれている。塔にむかって左

45

に二重水輪の五輪塔が立ち、六地蔵が横に一列に並ぶ。



写真 16

17. 豊田地区(写真 17)

所在地:豊田入口

地 番:隠岐郡海士町大字豊田 176 番地 3

紀年銘:なし

彫 字:猿田彦大神 願 主:見当たらない。



写真 17

大きさ:高さ150 cm×幅40 cm

特 徴:自然石。頂部を山に削る。基壇は1段。大神の部分が削れて見えにくい。タブ の古木の根元に立つがいつごろのものか全く不明である。左に青面金剛像が立 っている。

18. 豊田地区(写真 18)

所在地:豊田入口

地 番:隠岐郡海士町大字豊田 176 番地 3

紀年銘:なし

彫刻:青面金剛像

願 主:なし

大きさ:高さ55 cm×幅26 cm

特 徴:青面金剛で邪鬼を踏む。一面四臂、右手に独鈷を持ち、五指を折り曲げて握る。右手に輪(縦)を持ち、鈷状のものを持っているが、地の人はそれを「八手」説いている。邪鬼は二つとも獅子頭に似ている。半肉彫である。基段は三段。向かって左側上部に正の字を陰刻しているが、それが何を意味するのか分からない。基壇二台目の前側に添彫があるようだが風

化のために判然としない。



写真 18

19. 保々見地区(写真 19)

所在地:清水寺境内

地 番: 隠岐郡海士町大字知々井 769 番地 1

紀年銘:元次甲子六月吉日(元治)

彫 字: 庚申 願 主: 当村中

大きさ:高さ140 cm×幅26 cm

特 徴:自然石。頂部を山形に削る。基壇は一段。上部に日・

月瑞雲を陽刻し、下に青面金剛の通種子ウーンを陰 刻。中央切損。右側に伊藤平左ヱ門神灵と刻まれた碑

が立つ。



写真 19

20.知々井地区(写真 20)

所在地:北野神社境内

番 地:隠岐郡海士町大字知々井 1618 番地

紀年銘:なし

彫 字:猿田彦神

願 主:なし

大きさ:高さ144 cm×幅63 cm

特 徵:自然石(一部加工)、頂部山形。基壇1段。天保六年乙

未三月吉日(1835)の鳥居をくぐると左側に塔が立つ。



写真 20

21. 御波地区(写真 21)

所在地:太井

番 地:隠岐郡海士町大字御波 2133 番地 2

紀年銘:弘化二年巳三月十日

彫 字: 庚申

願 主:中原安次郎 世話人:森三郎

大きさ:高さ160 cm×幅35 cm

特 徴:自然石(一部加工)。日・月輪と瑞雲を上部に陽刻し、

下に青面金剛の通種子ウーンを陰刻。基壇なし。 願主、世話人、紀年銘は隣に立つ石燈籠に刻まれて いる。造立目的は「当村安全」である。当村とは旧

太井村のことであり、願主は村の年寄である。



写真 21

22. 御波地区(写真 22)

所在地:布施神社入口

地 番: 隱岐郡海士町大字御波 44 番地 1

紀年銘: 弘化二年巳三月十日

彫 字:猿田彦大神

願 主:なし

大きさ:高さ120 cm×上部30 cm×下部45 cm

特 徴:頭部が細い角柱めいた自然石。基壇は角形自然石一段。 御波区(旧布施)布施神社入り口の左横に立つ。自然石 の高い台座(70 cm)に自然石の塔身といった組み合わせ である。隣の旧太井村の庚申が青面金剛像の通種子ウ ーンを刻み、一石一仏を表現しているのに対し、この

塔は一石一神である。



写真 22

23. 多井地区(写真 23)

所在地:多井区の山の手、氏神社横の町道添い

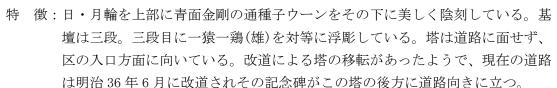
地 番: 隠岐郡海士町大字崎 895 番地 11

紀年銘:万延元年庚申八月

形 字: 庚申願 主: 当村中年 寄: 善助

世話人: 伝七、友四良

大きさ:高さ118 cm×幅25 cm



24. 崎地区(写真 24)

所在地:建興寺境内

地 番: 隱岐郡海士町大字崎 1741 番地 1

紀年銘:なし

彫 刻:金剛童子

願 主:なし 年 寄:善助

世話人: 伝七、友四良

大きさ:高さ61 cm×幅27 cm

特 徴:金剛童子の半肉彫で一面六臂。像の頭部の左右やや 上部に、日・月輪を陽刻している。像は邪鬼を踏み、



写真 24

右手に三鈷戟・宝剣、矢を持ち左手に輪(縦)・弓・索を持つ。三猿を添えた半肉彫である。笠あり。基壇は二段。面相の童形からして、青面金剛像というよりは、金剛童子と言った方が似つかわしいように思える。塔は海士町大字崎中良家建立の行者堂の鳥居をくぐると左側に立っているが願主が中良家であろうことは想像にかたくない。昭和52年の田邑二枝氏監修『崎部落史』には「ここの行者堂は中良家九代峰三郎の代に大峰さんにより行者を招請し、蔵玉権現を祀ったところという」とあり、そこに行者と庚申のつながりがあったのではないだろうか。ここには荒神も祀られ、見上げる大杉に藁作りの大蛇が巻き付いている。

25. 日須賀地区(写真 25)

所在地:日御碕神社境内へ続く道の川沿い 地 番:隠岐郡海士町大字御波 562 番地 1

紀年銘:なし 彫 字:庚申

(塔の半分が土に埋まり定かではない。)

願 主:なし

大きさ: 高さ 154 cm×幅 36 cm (土から出ている部分のみ計測)

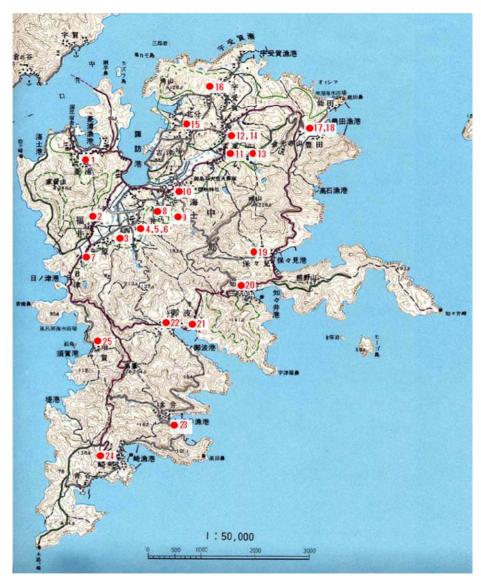
特 徴:自然石。頂部がとがる。青面金剛の通種子ウーンを陰刻。

基段なし。この塔は道路を背にし、道路下の小川に面し 立っている。碑の横に古井戸があることから「かわ」の

神様としても親しまれているようである。



写真 25



海士町の庚申塔分布図

一字一石経塔

一字一石経塔

一字一石経塔の前身としては「経塚」(きょうづか)があり、経典を地中に埋納して築いた塚のことである。歴史的には平安時代に始められた仏教的作善行為の一つで、経典は紙本(紙本経)のほかに、銅板や瓦などに記され寺社境内や霊地・霊山に埋納した。江戸時代になると、平滑な小石に『法華経』の一字あるいは数字を墨書して埋納する「一石経」が大勢を占め、寺院境内のほかに村境や街道に面しておかれた。海士町には江戸時代に建てられたものが3基、昭和に建てられたものが1基の合計4基あり、江戸時代の頃のものについては、当時はやり病を防ぐ為に建てられたと言い伝えられている。

1. 菱浦(写真1)

所在地:福山家墓地内

記念銘:出日 弘化二巳年 月日 (1845)

彫 字:(正 面)風化により判読不可

(右側面)出日 弘化二巳年 月日 (左側面)□□雲上寺隠居覚心故書

施主 福山口ヱン 故立

備考:風化により字が読み取れない箇所がある。



写真1

2. 福井(写真 2)

所在地:村上家墓地内

記念銘:嘉永七年甲寅秋九月吉日(1854)

彫 字:願主 村上喜平太基近建立

奉書写大乗妙典一字一石供養塔

嘉永七年甲寅秋九月吉日

願 主:村上喜平太

特 徴:法華経を小石一つ一つに字を書写したものを経蔵に収め その上に塔を建てたもので福井区の村上家の墓地の一画 にある。全高3メートル。当主の村上さんによれば当時 疫病が流行り多くの人が亡くなったのでその人々の供養

のために行った。



写真2

3. 東(写真 3)

所在地:常唱寺内

記念銘:昭和壬年六月吉日(1945)

彫 字:南無妙法蓮華経

(台座)一字一石

和歌山市和歌浦町養珠寺 横田日順(花押)

願 主:□木 常次郎

同ジン

4. 崎(写真 4)

所在地:建興寺(行者堂境内) 記念銘:嘉永元戌申四月(1848)

彫 字:村内安全

奉書寫太乗妙典一字一石寚塔

家運繁栄

願 主:大願主 渡辺峯三郎

筆者 雲上寺 隠居 覺心



写真 3



写真4

遺跡

銅 剣

竹田銅剣【島根県指定文化財】

とされた。

詳 細:昭和43年(1968)に島根県隠岐郡海士町 竹田で地元中学生にって銅剣とみられ る関の部分が採集され、昭和45年(1970) に日本考古学協会青銅器部会により発掘 調査が行われた。その結果、銅剣は溝状 遺構内に破棄されたもので、伴出土器は 弥生時代後期中葉の九重土器を伴うもの



▲竹田銅剣

遺跡

横穴・古墳・散布地 一覧

	名称	種別	所在地	概要	備考
1	郡山遺跡	散布地	海士中里	縄文土器、石斧、石匙他	
2	郡山東古墳	古墳	海士中里	3基	
3	郡山東1号墳	古墳	海士中里	円墳、ガラス玉	半壊
4	郡山東2号墳	古墳	海士中里	円墳、貼石、周溝、土師器	破壊
5	郡山東3号墳	古墳	海士中里	墳形不明	消滅
6	郡山西古墳	古墳	海士中里	粘土槨、鎌	
7	丸山古墳	古墳	海士 丸山	前方後円墳、勾玉、ガラス玉	半壊
8	日ノ津横穴群	横穴	海士 日ノ津	2 穴、海礫、須恵器	
9	宇田見古墳	古墳	海士 宇田見	前方後円墳、箱式石棺	(通称) 唐御 門、消滅
10	神崎横穴群	横穴	海士 神崎	5 穴、須恵器	
11	郡山瓦窯跡	窯跡	中里 郡	平入	
12	客戸原古墳	古墳	中里 東下口		
13	東古墳	古墳	東	円墳?、横穴式石室、土師器	町指定文化財
14	御波横穴群	横穴	御波 山尻	6 穴以上、直刀、須恵器他	
15	北分上坂横穴	横穴	海士	須恵器	
16	福井横穴	横穴	福井		消滅
17	島前分校横穴	横穴	福井	須恵器	消滅
18	菱乾けん場横穴	横穴	福井	須恵器	消滅
19	菱マユミ横穴	横穴	福井	須恵器	
20	家督古墳	古墳	福井 河原	円墳、横穴式石室	封土流失、半壊
21	安国寺跡	寺院跡	福井 安国寺	瓦	
22	源福寺跡	寺院跡	海士	御剣、御冠、上鳥帽子、鞠装鞠、鞠懸、御 木像、隠院の額、猫石、蛙石他	後鳥羽上皇行在 所
23	豊田横穴	横穴	豊田	須恵器	消滅

	名称	種別	所在地	概要	備考
24	宇受賀遺跡	散布地	海士 小敷	弥生土器、土師器、陶磁器	
25	保々見河西の裏 横穴	横穴	知々井保々見		
26	崎滝の下横穴	横穴	崎 滝ノ下		消滅
27	青谷滝の上横穴	横穴	崎 滝ノ上	刀子、釘、人骨、須恵器他	
28	竹田遺跡	散布地	海士	溝、弥生土器、銅剣	銅剣県指定
29	東遺跡	散布地	海士 東	須恵器、土師器、土玉、勾玉、黒曜石	
30	三田遺跡	散布地	海士 三田	石鏃、石錘	
31	福井鴨入道横穴	横穴	福井	須恵器、直刀、鉄鏃、銅製品	
32	堤遺跡	散布地	崎 堤	石斧	
33	館ノ元横穴	横穴	崎 館ノ元		
34	横畑古墳	古墳	知々井	方墳?、箱式石棺?	
35	唯山古墳	古墳	福井	円墳?、須恵器、土師器、ガラス玉、切子 玉、石玉、大刀、刀子、鉄鏃	発掘調査
36	郡崎遺跡	散布地	福井	郡衙跡?、布目瓦、須恵器他	
37	島前高校職員宿 舎裏遺跡	散布地	福井菱浦	土師器、須恵器	
38	森原遺跡	散布地	崎 森原	砥石、土玉、須恵器他	
39	西宮前遺跡	散布地	崎 西宮前	館跡?、陶器、鉄器、黒曜石	
40	北分水源地遺跡	散布地	海士北分	縄文土器、弥生土器他	
41	後鳥羽上皇御火 葬塚	古墳	海士中里		
42	因屋城跡	城跡	海士中里	建物跡、郭、堀切、堅堀、土塁、虎口、石 垣、陶磁器	森屋敷、館跡含 む
43	佐々木遺跡	散布地	海士 北分	石斧、石錘	
44	宇受賀命神社遺跡	散布地	宇受賀	土師器、黒曜石、土錘	
45	宇受賀港遺跡	散布地	宇受賀	弥生土器、黒曜石、土錘	
46	今浦横穴群	横穴	御波今浦	5 穴以上	発掘調査
47	今浦 1 号穴	横穴	御波今浦		

	名称	種別	所在地	概要	備考
48	今浦 2 号穴	横穴	御波今浦		
49	今浦 3 号穴	横穴	御波今浦	須恵器、土師器、釣針、金環	
50	今浦 4 号穴	横穴	御波今浦	鋤	
51	今浦 5 号穴	横穴	御波今浦	須恵器、土師器、勾玉、放頭大刀他	
52	奈伎良比売神社 前遺跡	散布地	豊田	須恵器、中近世陶器	
53	保々見神社遺跡	散布地	知々井保々見	須恵器、土師器	
53	百墓遺跡	散布地	御波	土師器、土師器、宝筺印塔	
54	御神尻遺跡	散布地	海士 御神尻	須恵器、土師器	
55	北野神社遺跡	散布地	知々井	黒曜石	
56	馬弓遺跡	散布地	菱浦	集落跡?、土師器、須恵器	
57	新開古墳群	古墳	海士	4 基	
58	新開 1 号墳	古墳	海士	円墳、須恵器、土師器	発掘調査
59	新開 2 号墳	古墳	海士	須恵器、土師器、鉄器	発掘調査
60	新開 3 号墳	古墳	海士	円墳、刀子	発掘調査
61	新開 4 号墳	古墳	海士	円墳、須恵器、土師器	保存
62	新開古墓	古墳	海士	宝筺印塔	移動
63	キブタ遺跡	散布地	菱浦	石斧、黒曜石、須恵器、土師器、羽口	
64	今井遺跡	散布地	海士 今井	土師器	
65	多井遺跡	散布地	崎 多井	土師器	
66	須賀遺跡	散布地	御波 須賀	須恵器、土師器	
67	吉田の奥古墳	古墳	中里	円墳、横穴式石室	
68	日平遺跡	散布地	海士	土師器	
69	中黒遺跡	散布地	海士	須恵器、土師器	
70	豊子共同墓地古 墓	古墳	宇受賀	五輪塔、宝筺印塔	
71	タドウ墓地	古墳	海士 北分	五輪塔、宝筺印塔	
72	峯 堂古墓	古墳	海士 北分	五輪塔、宝筺印塔	

	名称	種別	所在地	概要	備考
73	松尾山·金光寺 古墓	古墳	豊田	五輪塔、宝筺印塔	
74	金光寺旧道入口 古墓	古墳	豊田	五輪塔、宝筺印塔	
75	石ノ堂古墓	古墳	海士 東	五輪塔、宝筺印塔	
76	隠岐神社海難碑 公園古墓	古墳	中里	五輪塔、宝筺印塔	
77	村上家新墓地古 墓	古墳	中里	五輪塔、宝筺印塔	
78	大前家墓地古墓	古墳	中里	五輪塔、宝筺印塔	
79	猫神さん古墓	古墳	中里	宝筺印塔	
80	海士中学校前古 墓	古墳	海士 西	宝筺印塔	
81	天日共同墓地古 墓	古墳	海士 西	五輪塔、宝筺印塔	
82	佃本家脇古墓	古墳	海士 西	五輪塔、宝筺印塔	
83	田阿の崎お堂古 墓	古墳	福井	五輪塔、宝筺印塔	
84	安国寺古墓	古墳	海士 日ノ津	五輪塔、宝筺印塔	
85	北野神社裏古墓	古墳	知々井	五輪塔、宝筺印塔	
86	百墓古墓	古墳	御波	五輪塔、宝筺印塔	
87	須賀お堂前古墓	古墳	御波 須賀	五輪塔、宝筺印塔	
88	丸山古墓	古墳	崎 多井	五輪塔、宝筺印塔	
89	御堂墓地古墓	古墳	崎 多井	五輪塔、宝筺印塔	
90	崎旧道入口山中 古墓	古墳	崎	五輪塔、宝筺印塔	
91	観音寺跡脇古墓	古墳	崎	五輪塔、宝筺印塔	
92	ナカラ墓地古墓	古墳	崎	五輪塔、宝筺印塔	
93	内の浦古墳	古墳	御波	五輪塔	
94	矢原遺跡	散布地	福井	弥生土器、須恵器、土師器、磁器、水晶、 管玉、耳環、黒曜石、瓦	
95	三寺遺跡	散布地	御波	掘立柱建物跡、土師器、須恵器、鉄器、 土錘	
96	青次浜遺跡	散布地	海士 中里	須恵器	

美術工芸品

彫刻

1. 木造聖観音菩薩立像【島根県指定有形文化財】

•所 在 地:海士町大字知々井 772 番地

·指定年月日:昭和39年5月26日

• 備考

一躰。保々見区にある清水寺に納められている。明治 2年の廃仏毀釈の際に本堂と像等は火難に遭うが、現 存の本尊の観世音菩薩像は当時保々見の若林常松の信 仰によって自家に隠され厄を免れたと言われている。 重量感をもった像の印象から、制作年代を平安前期ま で遡ることができる。全体に虫食い、虫食いによる欠 損、胸部から脚部にかけて干割れ、左前膊ばより先・ 左手首・両足先の欠損が目立っていた。昭和39年に 島根県有形文化財に指定されるが特に処置することな く過ぎていたところに、保々見地区出身で京都造形芸 術大学前理事長の徳山詳直氏の支援もあり、平成3年 より着工し8ヶ月間の工期を終え平成4年(1992)に 無事修復作業を完了することとなりました。燻蒸を行 い、虫食いによる朽損部分は樹脂処理を行いました。 各欠損箇所については檜材及び漆で補修し、また、台 座を新補しています。平成25年隠岐国展に展示後、 本堂の修理が終わるまで後鳥羽院資料館の民具収蔵館 にて保存管理。平成28年の夏、清水寺の御堂へ納め ることができた。



もくぞうせいかんのんぼさつりつぞう
▲木浩聖観音菩薩立像

2. 狛犬【海士町指定有形文化財】

·所 在 地:海士町大字海士 1784 番地

·指定年月日:平成9年7月10日

• 備考

一対。現在の島根県雲南市で名門と呼ばれた田部家の23代目・長右衛門(国会議員・県知事)、現在の出雲市出身の櫻井三郎右衛門(実業家)両氏が、昭和14年隠岐神社鎮座祭に際して、彫刻界の巨匠であり、島根県出身者である内藤伸の制作した狛犬を奉納した。





▲狛犬

3. 教海寺流仏【海士町指定有形文化財】

·所 在 地:海士町大字海士 4655 番地 2

・指定年月日:平成9年7月10日

• 備考

十二躰。古くから区民に「津ノ山(津能山)」という愛称で呼ばれている教海寺に納められている。尊名が不明であるので木造不明立像あるいは、流仏という総称で呼ぶべき種類の像である。教海寺の流仏も実際に流されたものでなく、何らかの理由により破棄され、破損した像が現在ここに集められたものであろう。破損しているとはいうものの、像の持つ存在感は強烈なものがあり、十二躰が一同に並んだ様子は壮観である。

4. 木造矜羯羅童子像【海士町指定有形文化財】

5. 木造制吒迦童子像【海士町指定有形文化財】

· 所 在 地:海士町大字海士 5317 番地 2

· 指定年月日: 昭和39年5月26日

備考

それぞれ一躰。東地区にある金光寺に納められている。木造矜羯羅童子、木造制 吒迦童子像はそれぞれ不動明王の従者で ある八大童子の一人です。矜羯羅童子は 不動明王の向かって右に、吒迦童子は向 かって左に配置されますが、金光寺には 不動明王がおられない。

6. 木造如来形坐像 【海士町指定有形文化財】

7. 木造大日如来坐像【海士町指定有形文化財】

• 所 在 地:海士町大字海士 55 番地

·指定年月日:平成9年7月10日

• 備考

それぞれ一躰。木造如来形坐像は一木造 りであるが、傷みが激しく左右とも肘か ら下の部分を欠損している。木造大日如 来像は桃山時代か江戸前期の作と考えられる。



▲教海寺流仏(12 躰の内 6 躰)





美術工芸品

刀

1. 太刀 銘来国光【島根県指定有形文化財指定】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:昭和38年7月2日

為 書: 紀念銘:

備 考:一振



▲太刀 銘来国光

2. 太力 池田靖光作【海士町町指定有形文化財指定】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:平成9年7月10日

為 書:神前後鳥羽天皇七百年奉賛新作

刀奉納会

紀念銘:八鍬靖武 追銘 昭和十四年三月吉日

池田靖光謹作

備 考:昭和14年 後鳥羽院700年祭に奉納



▲太刀 池田靖光作

3. 太力 貲 堂作【海士町指定有形文化財指定財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:平成9年7月10日

為 書:神前後鳥羽天皇七百年祭奉賛新作刀

奉納會

紀念銘:昭和十四年三月吉日貞重謹作

備 考:昭和14年後鳥羽院700年祭に奉納



▲太刀 貞 重作

4. 太刀 守次則定作【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:平成9年7月10日

為 書:神前後鳥羽上天皇七百年祭奉賛新作刀

奉納會

紀念銘:月山貞一切銘 昭和十四年三月吉日

守次則定謹作

備 考:昭和14年後鳥羽院700年祭に奉納



本太力 守次則定作

5. 太力 吉原国家作【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館

指定日:平成9年7月10日

為 書:神前後鳥羽天皇七百年奉賛新作刀

奉納会

紀念銘:吉原義人追銘 昭和十四年三月吉日

吉原国家 謹作

備 考:昭和14年後鳥羽院700年祭に奉納



▲太刀 吉原国家作

6. 太力 堀井俊秀作【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:平成9年7月10日

為 書:神前後鳥羽天皇七百年祭奉賛新作刀

奉納會

紀念銘:昭和十四年三月吉日 堀井俊秀 謹作

備 考:昭和14年後鳥羽院700年祭に奉納



▲太刀 堀井俊秀作

7. 太刀 佐藤昭則作【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:平成9年7月10日

為 書:神前後鳥羽天皇七百年祭奉賛新作刀

奉納會

紀念銘:昭和十四年三月吉日 堀井俊秀 謹作

備 考:昭和14年後鳥羽院700年祭に奉納



▲太力 佐藤昭則作

8. 太力 ** 議院 義宗作【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:平成9年7月10日

為 書:神前後鳥羽天皇七百年祭奉賛新作刀

奉納會

紀念銘:月山貞一切銘 昭和十四年三月吉日

源義宗謹作

備 考:昭和14年後鳥羽院700年祭に奉納



▲太刀 源 義宗作

9. 太刀 月山貞光作【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:平成9年7月10日

為 書:神前後鳥羽天皇七百年祭奉賛新作刀

奉納會

紀念銘:昭和十四年三月吉日 月山貞光謹作

備 考: 昭和14年後鳥羽院700年祭に奉納



▲太刀 月山貞光作

10. 太刀 梶山靖利作【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:平成9年7月10日

為 書:神前後鳥羽上皇七百年奉賛新作刀

奉納会

紀念銘:島崎靖興追銘 昭和十四年三月吉日

梶山靖利謹作

備 考:昭和14年後鳥羽院700年祭に奉納



▲太刀 梶山靖利作

11. 太力 中尾忠次作【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:平成9年7月10日

為 書:神前後鳥羽天皇七百年祭奉賛新作刀

奉納會

紀念銘:昭和十四年三月吉日 中尾忠次謹作 備 考:昭和14年後鳥羽院700年祭に奉納



▲太刀 中尾忠次作

12. 太力 宗光作【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:平成9年7月10日

為 書:

紀念銘:吉原義人刻銘 昭和十四年二月吉日 備 考:昭和14年後鳥羽院700年祭に奉納



▲太力 常光作

13. 太力 或信作【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館

指定日:平成9年7月10日

為 書:

紀念銘:昭和十四年四月吉日

備 考:昭和14年後鳥羽院700年祭に奉納



▲太力 **政信作**

14. 太力 吉原義人作【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:平成9年7月10日

為 書:後鳥羽上皇七五〇年祭 奉納

紀念銘:昭和六十三年吉日 義人

備 考:昭和63年後鳥羽院750年祭に奉納



▲太刀 吉原義人作

15. 太刀 月山源貞作【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:平成9年7月10日

為 書:大和国三輪山峡 井河之上太阿

月山源貞一(花押?)嫡子貞利

紀念銘:後鳥羽天皇七百三十五年祭 於

御大前 謹鍛

備 考:昭和48年後鳥羽院735年祭に奉納



た ち つきやまげんさださく ▲太刀 月山源貞作

16. 太刀 助宗作【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町後鳥羽院資料館 指定日:平成9年7月10日

為 書:後鳥羽上皇七五〇年祭 奉納

紀念銘:昭和六十三年吉日 義人

備 考:昭和63年後鳥羽院750年祭に奉納



▲太力 助宗作

美術工芸品

台 子 皆 具 一 式

1.台子皆具一式【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町大字海士 1784 指定日:平成9年7月10日

詳細:昭和14年、隠岐神社創建に際し当代

一流の匠に依頼し制作。山田宗有宗 匠による献茶式で使用された。奉納 者には近衛文麿公爵等が名を連ねる。 隠岐神社の御神紋である菊浮線があ

しらわれている。



▲台子皆具一式

美術工芸品

書籍

1.大般若経【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町大字海士 1521 番地1

所有者: 字受賀命神社

指定日:平成9年7月10日

巻 数:四三四巻

詳 細:宇受賀命神社に納められていた大般若経。600 帖で1セットのところ、434巻

現存している。源福寺大般若経とはちがい、巻軸仕立てとなっており、お経の装丁としても古いタイプである。島前の文化財では、「永応5年(1398)」のものと記載されており、島前では西ノ島町の常福寺蔵大般若経(1289)に次いで2番目に古いとされ、指定に至った。はるか昔に火災で焼失しかけた所を、近隣の住民によって助け出された、とも言われていることもあり、確かに現存する箱は焼けて煤がついていたり、お経自体も虫食い焼けた跡などがあり、中にはお経を開くことが出来ないものもあるのが現状である。僧侶による転読のあとも見られる貴重な資料である。



▲大般若経(宇受賀命神社)

2.大般若経【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町大字海士 1521 番地1

所有者:源福寺

指定日:平成9年7月10日

巻 数:二百八巻

詳細:源福寺に奉納された大般若経。源福寺の大般

若経で現存しているのは 208 帖のみである。 折本装、版本で木箱 4 つに収納されている。 現存している箱の箱書きによると、もともと 十二箱あったことが読み取れる。もともと 1 箱 50 帖として、12 箱で 600 帖となる。そう 考えると約 1/3 が所在不明である。言い伝え としては焼失したとも伝えられている。お経



▲大般若経(源福寺)

の最初のページには、刊記があり、いつ誰から奉納されたのかが見てとれるものになっている。源福寺の大般若経で特徴的であるのは、刊記の部分を読むと京都などのお公家さんなどから送られていることが分かる点である。水無瀬家はもちろん、飛鳥井家や冷泉家など様々な方から送られている。普通は、お経の奉納というのは寺がある地域の有力者などが寄進するのが通常であるようだが、源福寺では本土からわざわざ送られてきている。

3.紙本墨書 金光寺縁起書 【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町大字海士 1521 番地1

指定日:平成9年7月10日

所有者:金光寺(東区)

巻 数:一巻

詳細:箱書「元県の所蔵する外等後にして将に散逸

せんとせしを防ぐた免余之を買需免おく

金光寺に代わって保管春るもの也

村尾晋作 蔵|

巻子は途中から始まっており、前文は箱書きの 通り無くなっているものと思われる。



▲金光寺縁起書

4.源福寺隠岐院額 【海士町指定有形文化財】

所在地:海士町大字海士 1521 番地1

指定日:平成9年7月10日

所有者:源福寺

詳 細:源福寺は後鳥羽院の行在所に当て

られた名刹であったが、明治の廃 仏毀釈にあい、寺地も移転のやむ なきに至り、宝物も分散され、わ ずかにその一部が保管されている。 当時、海士の豪族である村上氏が



▲源福寺隠岐院額

水無瀬家を介して、京都の公家持明院基延卿にお願いし、「隠岐院」の文字を 書いて頂き、奉納されたものである。

自然

希少植物

1.クロキヅタ【国指定天然記念物】

所在地:海士町福井(菱浦港)

島根県海士郡大字福井菱浦湾より西南方茅崎鳥島を見通した線内の海面

指定日:大正11年3月8日

詳細:隠岐島前西ノ島の黒木御所跡近くの海岸で、日本で最初に発見されたためクロキヅタと命名された。海藻類としては唯一、生育地域が国の天然記念物に指定されている。島根県では隠岐諸島でのみ確認されており、西ノ島の別府湾、黒木御所跡周辺、中ノ島海士町菱浦湾周辺などのほか、島後での繁殖は確認されている。隠岐諸島以外では、愛媛県の伊方町と高知県の沖の島にも分布しており、砂礫質の浅い海底では、砂に埋まっている岩上を中心として砂地上に匍匐枝を伸ばし、直径 2-3m のコロニーを形成しており、冬場の波の影響を受けにくい。冬場の波の影響を受けにくい水深 30cm から 2m の場所で繁殖していると考えられている。



▲クロキヅタ

2.オオバグミ林【海士町指定天然記念物】

所在地:海士町大字豊田抗美鶴一帯

指定日:平成9年7月10日

詳 細:豊田地区の明屋海岸の断崖のふちに沿って、垣根を

したうように端から端まで生息している慢性のグミ植物。葉が大きく円いので大葉茱萸または円葉茱萸(マルバグミ)という。常緑で10、11月頃に花が咲き、年を越して翌年の4、5月に紅熟する。近縁の種に蔓茱萸と秋茱萸がある。大きなものは高さ4m、太さ7、8 cmになる。他の樹木が混生しておらず、

このような特異な景観は他では見ることができない。



▲オオバグミ林

3.イヌマキ 【海士町指定天然記念物】

所在地:海士町大字豊田 489 番地

指定日:平成9年7月10日

詳細:裸子植物の針葉樹の仲間で、暖地の海岸に近い山

地で生育する。神社に植えられていることが多い。 木材は耐久性耐湿性に優れ、屋根、縁板等の建築

材、桶、水槽、棺、下駄などに使われる。

目通り 2.35m、高さ 20m あり、海士町のイヌマキ

としては、最大級のものである。

無傷で枝振りも良く生育状態は良好である。この

ような大木は珍しく、貴重である。



▲イヌマキ

4.オハツキイチョウ【海士町指定天然記念物】

所在地:海士町大字海士 4970 番地 指定日:平成9年7月10日備考

詳細:イチョウは他に近縁なものがない特殊な植物である。

「生きている化石」と呼ばれ、他の近縁種は中生代ジュラ紀(2億年前~1億5,000万年前)に最も栄えたが、恐竜とともにほとんどが絶滅し、イチョウを残して200万年前には完全に死滅した。目通93m、樹高約20m、樹齢



▲オハツキイチョウ

105年。葉の先に果実を付けることがある「お葉付き銀杏」で全国的にも非常に珍しい。この現象は「先祖返りといわれるが(人では尾, 副乳など)そのメカニズムは解明されていない。

5.モチノキ 【海士町指定天然記念物】

所在地:海士町大字海士 3563 番地

指定日:平成9年7月10日

詳細:常緑樹の仲間で本州から南西諸島の温暖な沿岸に

生育する小高木である。目通り 2.5m、樹齢 300 年以上(推定)とされており、島根県下で唯一天

然記念物の指定がされている。



▲モチノキ

6.ハマビワ 【海士町指定天然記念物】

所在地:海士町大字豊田 30 番地 2

指定日:平成9年7月10日

詳 細:海辺に生育する海岸植物で、大きく細長い葉がや

やビワに似ることからハマビワの名がついた。

島根、山口両県の日本海側、高知県、九州、琉球、朝鮮半島南部という特異な分布をし、隠岐はその北限自生地とされている。海士の海岸の自然植物を構成する小高木でよく見られるが、あまり大きくはならない。この木は根元より二本にわかれ目通りそれぞれ約90cm、高さ7m、樹齢100年程度と推定される。古来より、漁師等の目標木として

シママツの名で呼ばれてきた。



▲ハマビワ

7.イヌマキ 【海士町指定天然記念物】

所在地:海士町大字海士 194 番地 1

指定日:平成9年7月10日

詳 細:目通り2.20m、高さは20m位。この木は庚申塚の

神木として保護されて来たと考えられている。このイヌマキのような大木は貴重である。デコノキという方言は、この実の形を人形に見立てたもの

で、甘い。



▲イヌマキ

8.スギ 【海士町指定天然記念物】

所在地:海士町大字福井 281 番地

指定日:平成9年7月10日

詳細:この大杉は緑杉系のもので、樹齢は不明であるが数百年は数えると推定する。その太さは目通り 4.55m、高さは約 25mある大木である。生育状況は良く、地上

10mあたりより出た枝は太く生々としている。



▲スギ

9.北野神社の椿・銀杏・杉 【海士町指定天然記念物】

所在地:海士町大字知々井 1618 番地

指定日:平成9年7月10日

詳 細:椿一株…目通り2.15m高さ約13m。

銀杏一株…目通り 4.8m高さ約 25m。雌木。 杉一本…目通り 5.15m高さ 15m、及び目通り 3m高さ 30m。



▲ツバキ

10.タケシマシシウド【海士町指定天然記念物】

所在地:海士町大字豊田73番3から561番地2

指定日: 平成 24 年 7 月 10 日

詳 細:島根県の絶滅危惧 I 類にも指定されている セリ科の植物である。山地に生える多年草。 花期は6月~7月で、白い花弁を持つ複数 形花序となる。本種が含まれるセリモドキ 属には、本種とセリモドキの2種類のみが あり、本種は韓国の鬱陵島にのみ生息する 固有種であるとされてきたが、海士町でも 確認された。国内の生育地は海士町のみで あり、極めて限られている。セリモドキの 草丈が30~90cm、花序の直径が5~10cm で

あるのに対し、本種は草丈が 150~200cm、

花序の直径も20cmになる。



▲タケシマシシウド

コト

海士町では各地区ごとに、個別の歴史文化の継承がみられる。 そのため、どの地区にもある伝承や慣習も、各地区で違いがみられることがある。

【コト】の分類は、年中行事、神話・伝承、承久楽、島前神楽 を紹介することで地域の独自性が強い民俗文化が現存していることを知ることができる。

民俗・伝承

年中行事

■ 1月1日 あご石神事



「あご石神事」は平成22年4月26日に海 士町指定文化財に指定された。元旦に宇受 賀命神社で行われる神事である。

開催時期:元旦の朝7時頃から始まる。

内 容:豊作豊漁の祈願。大歳に禰宜さん(神社の禰宜さんではなく、神社の世話焼きである総代のことを指す)があご(トビウオ)ににた石を宇受賀の海岸で24個拾ってくる。元旦当日、拾ってきた石を箱に納め奉納し来年まで保管する。当日神事に使用するのは、昨年拾ってきた石24個で、総代さんが24個の石を「大漁(だいりょー)」と叫びながら海に向かって投げる。あご(トビウオ)に似た石を投げることで、あごが押し寄せるほどの大漁を祈り、また、あごが大漁に網にかかる姿はお米の稲穂の実りに似ており、豊作豊漁を祈る。



▲神事の様子



▲早大があご石を投げる様子

■ 1月2日 松直し

漁師さんや個人の船を持っている方が行う行事である。お正月 1 月2日に行われる行事で、船にかざったしめ飾りを2日におろし、船の周りにお神酒をかけ、大漁祈願をする。昔は漁師さんも多くおられたため盛大におこなわれていたが、現在では各家庭で行う場合が多くなっている。

ごかん ち

■ 1月5日 お日待ち講(五間日講)



▲宇受賀地区

地区によって、天照大神または氏神を祀る講。現在、大体 1 月 5 日直近の日曜日か、講員の都合の良い日程に合わせて開催される。神事により御祓い・お祈りした後、組の親睦を深める直会をする。

■ 1月10日 十日恵比須



▲菱浦地区

1月10日の初恵比須のことを「十日戎」という。 海士では「戎」ではなく「恵比須」と表記している。有名な祭りとしては、兵庫県西宮市の西宮神社や大阪志浪速区の今宮戎神社などがよく知られている。えびす神は本来漁業の神であったが、室町時代に七福神の1つとなり、福徳をもたらす神として、商売繁昌と結びついて各地に広まった。

■ 1月15日 とんど焼き

小正月の火祭行事。正月飾りの処理を行うとともに、正月の神送りとして考えられることが多い。昔は組単位で行われていたことであるが人口が減ってしまったために、現在では各地区ごとに子ども会が中心となって行う場合が多くみられる。また、地区としては行わず、各家庭で済ませる場合もある。

■ 1月28日 荒神祭



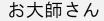
▲西地区

海士町では山や田んぼで悪さをするネズミを退治して、五穀豊穣を祈る「荒神祭(二十八日講とも呼ばれる)」が行われている。地区によって違いはあるが、毎年1月28日ごろに藁で大きな蛇体を作って荒神さんの大木または祠に巻くおまつりで、作り方や御利益なども様々である。

■1月末から3月末 焼火神社 初詣り

焼火神社は、島根県隠岐郡西ノ島町にある神社である。航海安全の守護神として遠くは三陸海岸まで信仰を集めた旧県社で、本殿・通殿・拝殿からなる社殿は国の重要文化財に指定されている。その焼火神社で、毎年大体 1 月末から 3 月末にかけて、「初詣り」が行われる。海士町内各地区ごとに、焼火神社にお参りし、ご祈祷してもらったあと、焼火神社社務所にて直会が開かれる。

■ 旧暦 3 月 21 日





▲保々見地区

弘法大師の命日である旧暦 3 月 21 日に行われる伝統行事で、弘法大師ゆかりの御堂などで地域の方々が手作りのお料理で接待してくださいます。お参りをする人たちは、各地区の御堂ををまわりながらお料理を頂く、和やかで伝統的な行事です。

■8月 盆の準備とお盆



▲知々井地区 精霊船流し

ご先祖様をお迎えするお盆は、地区ごとに、準備の仕方、盆踊りで歌う歌、踊りにも違いがある。また、8月16日に、ご先祖様をお送りする「シャアラ船流し(精霊船流し)」が行われる。

■10 月末~11 月 恵美須祭の風流 だんじり



「恵比須祭の風流 だんじり」 は平成9年7月10日に海士 町指定文化財に指定された。 海士町で唯一の「だんじり」が組 み入れられている祭りで、北前 船により海士町・崎地区へ根付 いたと言われている。4年に1度 行われる盛大な祭りである。

開催日程:4年に1度、10月末か11月初めに行う(日にちは区の役員で相談して決定)。 昔は1月10日に十日恵比須祭りと同じ日に行っていたが、現在では10月末 ~11月初めになった。理由としては、他の行事と被らないためと、だんじりに は練習が必要で、練習時間をきちんと取りたい為に、行事の比較的少ない季節 にしているとの事である。

内 容:子どもが乗る台のことを「だんじり」と呼び、神さまを乗せるための神事はないが、子どもを乗せることで神様を乗せていることとしている。だんじりのはじまりは明らかにはなっていないが、江戸期の北前船で崎の船員が働いており、大阪の西宮祭りを見物し、崎に持ち帰って始めたと言われている。明確な記録はないが、文久年間(1861年~1863年)に宇受賀命神社の遷宮祭の際に崎のだんじりが繰り出されたと言われていることから、この時代には崎のだんじりは海士町内で有名なものとなっていたと考えられる。もともと、車のついた造り物を引くのが原型だが、崎の地形から引くことが困難なため、神輿を担ぐ型になったと言わ

れている。 だんじり練りの初めは、木遣り風の 唄に合わせて練り、次に神輿を担ぐ時の掛け声 「チョウサイタ」に合わせて練り、そして又木 遣音頭によって前進しながら繰返していくとい うものである。以前は崎村(崎地区)を一周し ていたが、現在は氏神社の拝殿前に到着して終 わる。だんじりの装飾で飾り付ける木にしいの 木を使用するのはお金が出来る、縁起の良い木 と言われているからである。だんじりの上の蝶 がいるが、昔は鯛だった。平成元年の機会に蝶 に改めた。鯛は十日恵比須の名残で、蝶は囃し 言葉に「チョーサイタ」という掛け声があるた め。花飾りは、花飾りを作ったものしか、だん じりに飾る権利がない。



民俗・伝承

神話・伝承

1. 隠岐国の名称

隠岐の国は、伊邪那岐(いざなぎ)。伊邪那美(いざなみ)の神の夫婦が、国造りの時に 四番目に生んだ「隠伎の三子の嶋」です。島に大木があり、天照大御神(あまてらすお おみかみ)がご覧になって「美しい御木」と言われたことから「御木国」に変わったと 言われているが、隠岐の延喜式内の名神はこの「御木」の番をするために高天原から下 ってきたと伝えられている。

2. 木の葉人

隠岐諸島に初めて住みついた人で、獣の皮を着て、その上に木の葉を潮水に浸したものを乾かして羽織り、葛や川柳を綴ったものを着ていたことから木の葉人と名前が付いた。髪も切らず、髭も伸びたままで目だけが光っていて、恐ろしい姿だったが性格は温順であった。隠岐島全土に分散して生活していた。

3. 海人

木の葉人の次に来島した人で体いっぱいに入れ墨をしているが温和な性格。出雲の国よりやってきて、木の葉人と一緒に生活するようになる。後に海人の方が多くなり、木の葉人の文化は海人の文化と同化した。

4. 大山祇 命と宇受賀 命 の妻争い

この神様は宇受賀を中心に、中ノ島一帯を領して勢力のある土着の神様でした。あるとき、海を挟んだ西ノ島にいる美しい比奈麻治比売命となんとか結婚しようと申し込みました。しかし、姫神はなぜか色よい返事をしませんでした。けれども、宇受賀命はあきらめないで、同じ求愛の手紙を何回も何回も書いて送りました。これには姫神も困ってしまい、窮したあげくに次のように言いました。「あなたと結婚するのはかまいませんが、実は、あの大山神社の神様が恐ろしいのです。ですから、お二方で力比べをしてください。私は、勝ったお方に従いましょう。」大山神社の神様とは、比奈麻治比売命と同じ西ノ島に住む大山祇命のことです。一説には、この神様は焼火山の神様であったともいわれています。大山祇命は、農業などに力を入れた立派な神様でしたが、なかなか勇猛で、この神様が同じく姫神に恋しているとあっては、事は面倒になりました。石を投げ合う力比べの結果、宇受賀命が勝利し比奈麻治比売命と結婚しました。

5. 大山祇命と宇受賀命の力比べ

大山祇命は力比べで納得できず、もう一度力くらべをしようと宇受賀命に持ちかけました。 宇受賀命は家督山の榊を、大山祇命は焼火山の榊をかけて勝負し、大山祇命が勝ち、家督山 の榊を全て持っていきました。なので、家督山には榊が生えていません。

6. 明屋海岸

比奈麻治比売命が宇受賀命の子「柳井姫」を産んだ場所が明屋海岸。お産の穢れをはらい七五三の注連縄をあげて、「産屋が明けた」と意味でおこなったことから明屋という名前が付いた。また、比奈麻治比売命がお産の時に使用した、屏風とたらいをすてたところ、それらがタライ岩と屏風岩になりました。

7. **奈伎良比売** 命

往昔、伊予の国から船出していた奈伎良比売命が、日本海を航海中に大時化に遭い、やがて方角も失い途方に暮れていたところ、遥か彼方に点った灯火を頼りにこの地に上陸し、そこで地域の住民に温かいもてなしをうけたことにより永住を決め、やがて当地の産土(うぶすな)神として祀られ、この地に鎮座された。稲穂が豊かに実るので豊田という地名を付けた。

8. 熊野神社

頂上に須佐之男命を祀る。昔、この神様は桶に乗って海を渡ってきた。着いた所が保々 見港の南側の海岸で、桶を捨てたから「おけがら」という地名になったと伝えられている。

9. 太井の石神

昔、太井の農家が植え付けを終えた田を見廻ると、田んぼに一抱え程の石が落ちていました。子供のいたずらかと思い、田んぼから引き揚げて置いましたが、翌朝もまた次の日も同じ場所に落ちていました。不思議に思い、何度も石の置く場所を変えたり、遠くへ離しても同じように続きました。とうとう「この石はただの石ではあるまい」と言う事になり、氏神様の境内に揚げ、祀ったところ、不思議なことにだんだんと大きくなり、その石は未だに成長を続けていると伝えられています。

10. 太井の延命地蔵

御波の山上に200 基ばかりの墓石が群居しています。墓石の形は様々で鎌倉時代前期のものと思われるものから、江戸期まで種々雑多にあります。里人は祟りを恐れ、あまり近づこうとしないそうです。1250 年前から遠流の島と定められ近世に至るまで、流された流人の数は枚挙にいとまがありません。朝鮮風の墓も混ざっているところから見ても、半島との交通上の要衡となっていたのがわかります。中央に屋根の付けた大きい五輪の塔が2基あります。これを延命地蔵と言い、その下に宝物が埋めてあると言われていて、もし太井地区が立ちいかなくなれば、地蔵の下を掘れと言われています。

11. 七鼻女房

昔、布施村の前田庄屋が、海士村の村上庄屋へ行こうと、馬で石仏道へ差しかかったところ、いきなり髪を振り乱した七尋女房が現れ、馬のくつわを取り襲いかからんばかりの形相で睨みつけました。これを見た庄屋は、腰に差した刀を抜く手も見せず斬りつけたところ、七尋女房の姿は消えてしまいました。辺りをよく見ると、近くにあった石仏の肩口が斬られ、首が無くなっていました。この石仏は流行り病の時に、とても霊験が

あるといわれ大変信仰されていました。昭和初期までは不便な山中にも関わらず、その 御縁日には出店があるほどの賑わいだったそうです。

12. くにびき神話

出雲風土記によると、出雲の国が未完成なことを憂いた八東水臣津の命が、4つ国から 国を引き寄せて縫い合わせ、現在の島根半島ができたとされています。その中に出て来 る「北門の佐伎の国」が海士町崎であるとされています(平城京跡から出土した木簡の 記述などから立証されています)

13. 因幡の白兎

「古事記」の神代には書かれているのが、出雲神話の1つ「因幡の白兎」で、隠岐の島の海士(あま)町知々井の保々見湾に浮かぶ「経(きょう)島」へ棲んでいた白兎が、本土へ渡ろうとして、隠岐の島から因幡の浜へ鰐鮫(わにざめ)を欺いて並べ、その背を飛んで行ったけど、最後に嘘がばれて、皮を剥がされました。だから現在は、隠岐の島の他の3島には兎が棲んでいるのに、海士町には兎が飛び出して1羽も棲んでおりません。

14. 唐橋の鼻伝説(福井地区)

唐橋中将は後鳥羽上皇をしたって出家し、海士の唐橋に隠れ住み追手に追われて島後で亡くなったという伝説がある。終戦直後までお墓の上に「すや」を作って御波地区の人が祀っていたそうだ。

15. 福井の若宮

海士町福井の竹山の中に「若宮さん」という石造の小祠があります。海士の村上家からその昔に分家して福井に居を構えた村上家があります。そのころ、この分家の当主は福井の庄屋職を務めて広大な領地を所有していましたが総領息子が放蕩したので、怒ってその息子を折檻しました。すると息子は腹立ちまぎれに槍の間の鴨居に縄をかけてくびれ死にました。それから、しばらくすると息子の自殺した槍の間が夜ごとに鳴動し、天井裏や欄に大蛇がはうようになりました。恐れをなした親や親戚のものたちは、屋敷の一角に石造りの小祠を建てて神楽を奏して息子の霊を慰めてやりました。以来、大蛇がのたうちまわることはなくなりましたが、今でも放蕩息子を持つ親たちが参詣すると必ず息子の身持ちが修まると言われている。現在では旦那の浮気や素行が悪い奥さんが、夜な夜な人目につかずお参りすることが出来れば、旦那の素行が良くなると言われている。また、旦那が人目につかずお参りすることが出来れば、許されると言われている。

16. 穂々美神社の逸話

ある時期、知々井の田んぼは稲を植えても全く実らなかったため、ある者に拝んでもらった。その際に、「須佐神社に大きな桜の木があり、それが隠岐へ影をさす為に実らないのだ。その木を切ってもらえ」と言われ、その通りにしたところ、稲がたくさん実った。それが穂々美神社の名前の由来ではないかと思われる。この逸話は須佐神社の七不思議の一つとされ、また桜の木は影無桜と呼ばれている。

17. 平家の落人伝説(知々井)

北野神社にある荒神さんの祠横に以前は長屋が建っていた。そこに残っていた位牌には『イタヤ・ワタナベ・オオワキ・イトウ・スミヤ』の名前があった。(年代不明)中でも、スミヤは平家の落人・若宮であり、知々井に移住していた。(過去帳から判明)ワタナベは崎の渡辺家と関係している可能性がある。オオワキは隠岐に渡った後醍醐天皇の妹の女中と関係しているだろうと推測される。

18. 大脇姓について(知々井)

後醍醐天皇の娘・瓊子(たまこ)内親王は、天皇が隠岐へ配流した後、北条高時に追われ 米子まで逃げてきたが天皇の親族であることから隠岐に渡ることが許されなかった。父を 心配する娘の代わりに隠岐へ渡ったのが、当時瓊子内親王の女中であった「オオワキ」で ある。オオワキはみくりやから隠岐へ渡り、瓊子内親王は尼寺(「安養寺」鳥取県米子市) を開いていた。知々井から安養寺宛に3通の手紙を送っていたことから、オオワキは知々 井に定住していたと推測される。また、区内にオオワキの墓がある。安養寺に所蔵されて いる古文書は米子市指定文化財に登録されている。

民俗芸能

承久楽

承久楽

「承久楽」は平成9年7月10日に海士町指定文化財に指定された。昭和14年隠岐神社造営を機に奉納された舞である。

内 容:

「我こそは新島守よ おきの海の あらき なみかぜ心してふけ」これは、後鳥羽上 皇遠島百首の中の御製である。この御製に作曲と振付けがなされ、上皇景仰舞楽として昭和14年、後鳥羽天皇を御祭神とする隠岐神社の造営を機に奉納されたものである。以来、毎年隠岐神社の例大祭では、小学生の女子による4人舞が奉納される。式年祭では、普段立ち入れない



後鳥羽天皇御火葬塚の柵の中に入り巫女舞を奉納する。承久楽は当時の宮内省楽部楽長であった多忠朝作曲によるもので、その清新な作曲形式は日本の雅楽史上、特異な地位を占めるものと言われている。所要の楽器は、笛、篳篥、琵琶、鞨鼓、太鼓、和琴、鉦鼓の7種類にも及んでおり、なかでも笛と琵琶は上皇の愛奏楽器であったということから、作者は特にそれらを主奏楽器としている。この舞楽は隠岐神社だけではなく、大阪府の水瀬神宮へも奉献されている。

島前神楽

島前神楽



「島前神楽」は昭和36年6月13日に海士町指定文化財に指定された。神楽は平安時代に宮中で行われ、一般的になり盛んになるのが江戸時代の頃と言われており、隠岐の神楽も400年以上前から行われていると言われている。隠岐には「社家」といわれる神楽を専門に行う家があり、門外不出で舞われていた。隠岐島前神楽の特徴は「畳2畳ほどの狭い空間でダイナミックに舞う」ことである。

内 容:

隠岐では「社家」と言われる神楽を専門に行う家があり、門外不出で舞われた。島後に周吉郡に7家、隠地郡に6家、島前三島(知夫・西ノ島・海士)で5社家あった。島前の5社家は、海士町北分地区の駒月家・日須賀の秋月家、西ノ島町に別府の宇野家・赤ノ江の秋月家、知夫村に古海の石塚家があった。神楽は神事的なものであり、各地区の氏神様の例大祭で行うか、祈祷神楽として「雨乞いの神楽」「病気平癒神楽」「表替神事の神楽」「大漁祈願の浜神楽」などが挙げられる。

演 目		
1	七座(前座)	①寄せ神楽 ②神途舞 ③入申 ④剣舞 ⑤茣蓙舞 ⑥茣蓙舞清め ⑦幣帛舞
2	式三番	①先祓い ②湯立 ③隋神能
3	式外の能	①切部 ②恵比須舞 ③天の岩戸④八重垣 ⑤十羅 ⑥鵜の羽 ⑦佐蛇
4	その他	①巫女舞 ②布舞 ③舞い児 ④注連行事 ⑤御扉 ⑥月の輪かざし⑦神戻し





ヒト

古くから海士町においては、御食国における都との繋がり、北前船の往来、風待ち港での文化交流、遠流の島、など、島外の地域との文化交流は、【ヒト】により育まれてきた。

【ヒト】の分類は、庄屋、遠流の島、偉人、産業に分類し、島外との交流を行ったヒトと、交流をもたらした自然環境を活用した産業を紹介していく。

人物・交流

庄 屋

1. 福山(山崎)家

地 区:菱浦

内 容:元禄からの旧家で海運業(廻船業)を営んでいたと記されるものもある。島前 旦那既往現代によると、善市の代に乗船業で儲け大きくなったという。福山家 当主脩氏は隠岐神社執事を担当したり、功労者として叙勲を受けたりしている。 子孫の方は現在も海士へおられる。

2. 小谷(竹屋)家

地 区:菱浦

内 容:島前旦那既往現代によると、小谷家は郡内の資産家であったけれど病人などの 不幸も続き、また、琢五郎氏長く村長に選任せられ多くの交際費も入りたが、 もともと経済観念に乏しきためか、大に資産をへらしておわったとされる。現 在海士にはおられない。

3. 魚山家

地 区:菱浦

内容:北前船により栄えた旧家。現在海士にはおられない。

4. 村上家(分家)

地 区:福井

内 容:福井で庄屋をしていた。 村上キヘイタは隠岐騒動の窓口になった人物。 火事で文書等々は全焼し、残っていない

5. 村上(森)家

地 区:中里

内容: 隠岐一国のなかで最も有力であった豪族

海運業を営むほか、庄屋や後鳥羽天皇御火葬塚の守部を任されるなど、村の中心的存在であった。経済力で隠岐に君臨した全盛時代は村上秀親、秀家の代(1596~1645年頃)で、大きな要因としては西廻り航路の開拓であると言われている。

6. 村尾(代宮屋)家

地 区: 宇受賀

内 容:三百年来郷社である宇受賀命神社の祠官にして、また宇受賀村の庄屋、島前の 大庄屋を務める家筋。「村尾家文書」を持たれている。

7. 和巻家

地 区:豊田

内 容:江戸時代ごろの庄屋であった。以前土蔵があり、和巻家文書と言われるものを 所有されていた(町史に記載あり)。しかしながら現在土蔵はなく、文書もある か不明。

8. 渡辺家(中良家)

地 区:崎

内 容:古文書がのこる。美作三星山の城主であった渡邊氏は、毛利元就との戦に敗れ 隠岐島前に逃れる。崎地区に定着し大地主となり、十数代三百数十年の繁栄を 誇った。

遠流の島 海士町

遠流の島 海士町

隠岐が「遠流の島」に定められたのは神亀元年(724年)からである。江戸期以前は小野篁や後鳥羽上皇など、位の高い人物や政治犯の遠流の地となっていた。

中でも代表として挙げられるのが後鳥羽上皇である。後鳥羽上皇は承久 3 年 (1221)の承久の乱に敗れ、隠岐・海士へ御配流されることとなった。多芸多才で あった後鳥羽上皇は、海士でもその才能を活かし「遠島御百首」を詠まれ、かつて の海士町の様子を知ることが出来る貴重なものとなっている。

江戸期以降は一般の罪人も送られており、天明 8 年(1788 年)から安政 3 年(1856 年)までに 222 名流されたと記録は残っている。

このように、様々な身分の人々が海士へ訪れたが、この人たちによって海士町の文 化に大きな影響を与えたことがわかる。

1. 小野篁

年 代:承和5年(838)

内容:天長10年(833)東宮学士であり、承和元年(834)遣唐副使を命じられ承和3年7月に出発したが暴風にあい肥前の国松浦郡の別島に漂着。翌年7月に再度挑戦するがまたも暴風で漂着し渡航に失敗。承和5年に3度目の出発を命じられたが病気と称して乗船を拒否したため、隠岐に流される事となった。隠岐に流された篁は、承和7年(840)に赦免され都へと帰った。小野篁配流在島中の史料としては、『古今和歌集』に載せられる二首の和歌と、『和漢朗詠集』にのっている漢詩が広く世に知られている。

2. 後鳥羽上皇

年 代:承久3年(1221)

内 容:第82代天皇。治承4年(1180)に生まれ、兄である安徳天皇が源平の争いにより平家とともに都落ちしたために急きょ4歳で即位された。承久3年(1221)の5月、挙兵するが、鎌倉幕府の圧倒的な兵力に敗れる。約二か月後には隠岐へ遷ることが決まり、出家し、住み慣れた京都を旅立った。院は隠岐に来られてからも、『遠島御百首』、『遠島歌合』など多くの和歌を遺され、御年60歳で崩御となった。

3. 飛鳥井雅賢 左近衛府少将

年 代:慶長13年(1608)

内 容:飛鳥井雅賢は左近衛府少将であったが、遊蕩の罪で隠岐へ配流される事となった。在島中は源福寺隣地に住み、後鳥羽院山陵の清掃、修復を怠らなかったと 伝えられ、公文村上九右衛門に家伝の蹴鞠を伝授していたことも、村上家文書 に記録として残っている。

4. 小野尊俊

年 代:延宝2年(1674)

内容:日御碕検行であった小野尊俊は、松江藩主に流され隠岐に渡った特殊な流人。 罪状は不明だが、延宝2年8月に流され、延宝6年(1678)に憤死したと伝えられている。小野尊俊を祀った推恵神社があり、町民からは「推恵さん」と呼ばれ親しまれている。明治前期までは百姓がよくお参りしており、尊俊の霊神に対する崇敬は深かった。「しろみて」という田植えの終わりの日を推恵神社の祭り日とし、村民が集って神楽を奉納し、虫よけの霊験としていた。

人物・交流

偉 人

1. ラフカディオ・ハーン (小泉八雲)

地 区:菱浦

内 容:明治25年(1892) に隠岐諸島へ来島。8日間海士へ滞在。鏡浦を命名し、岡崎 旅館に宿泊した。

2. 加藤楸邨

地 区:中里

内 容:明治38年生まれ(~平成5年)の国文学者で、俳人。歌人である後鳥羽天皇を 慕い、昭和16年に隠岐に渡る。村上家にて句を詠んだと言われている。

3. 井戸平左衛門

地 区:豊田 保々見

内容: 芋代官の石碑がある。

人物・交流

海 運

縄文期の遺跡から島後で産出された黒曜石が出土していること、また、延喜式に海士町の 干し鮑が朝廷に献上されていたことが記載されていることからあ、古代より海士町と本土の 海運航路が確立されていたことが推察される。近世においても幕府巡見使一行の往復には美 保関、または宇龍(出雲市)から知夫へ渡っていた。寛文10年(1670年)、河村瑞件が西廻 航路を開発してから北前船海運が始まり、菱、日之津、須賀などに寄港し、風待ち港として 利用されるようになり、当時の島の有力者であった村上家を中心とし海運業が盛んとなった。 海運業については多くの文献が残されており、海士町の産業を支えていたことがわかる。ま た、海運業は産業だけでなく文化にも影響を与えており、現在の崎地区の「だんじり」は崎 地区出身の北前船の船員が大阪から持ち帰ったものが起源とされており、「伊勢音頭」などの 民謡も北前船により伝わったとされる。このように、海運業の影響によって、海士町は他地 域の文化に触れる機会が多く、大いに影響を受けたことがわかる。

生 業

牧 畑

古くは吾妻鏡(文治 4 年、1188 年)11 月 22 日条の頼朝下文の中に「宇賀牧」という言葉が出てくることから 1188 年以前より隠岐には牧畑が存在していたとされている。主な作物は大麦・小麦・小豆・大豆で、稗・栗・蕎麦・豌豆(えんどう)・黍(きび)を少量栽培していた。 牧畑は耕作地を四区に区切り、1 区画で 1 年目放牧、2 年目麦、3 年目稗又は蕎麦、4 年目小豆、大豆と違う作物を栽培する農法で、他の区画と同じ作物が栽培されないようになっていた。しかし、その栽培方法は粗放で肥料を施さず、中耕を行わないため収穫量はさほどでもなかった。牧畑は山稜の地に設定され、急こう配山林に階段を設け農地を広げていたが人口の増加に伴い本畑に改められた。次第に手入れをされず山林化または植樹され、牧畑は減少していった。 明治 20 年の海士郡には 25 か所の牧畑があった。

生 業

養蚕

海士町(当時の海士村)では明治17年頃より本格的に養蚕が開始され、農業経営を発展させた。当時の農産物は自家消費をしていたため、現金収入を得る手段として養蚕業は開始され、牧畑の面積が縮小して、衰退していくなかで桑園の面積が拡大され、養蚕業は奨励されていった。 昭和7年頃が最も養蚕が盛んな時期で、海士町は隠岐諸島内の町村で最も生産高が高く、140.06トンと大きく引き離した。しかし、昭和17年以降、食糧増産の必要性から徐々に衰退していった。

生 業

い も 倉

享保17年(1732年)に大森代官であった井戸平左衛門によって、さつまいもの栽培が奨励され、さつまいも栽培のきっかけとなった。そして、明和9年(1772)に幕府の巡検使が隠岐を訪れ、さつまいもの栽培を奨励することによって普及していった。普及後は町民の主食となり保存食にもなった。貯蔵する際に、いも倉と呼ばれる、崖に横穴を掘り貯蔵した。この芋蔵は各地区に存在するが、北分地区や宇受賀地区の地質がいも倉を掘るのに適している。北分地区や宇受賀地区は石が混ざっていないカバ地(火山灰の混ざった土壌)であるため、横穴を掘りやすく、水の浸入が滅多にないが、他の地区で掘ろうとすると、水が浸入する上に適当な場所を見つけるのが難しい。

生 業

畜 産

牧畑が行われていた際に、牛馬が放牧されていたことは牧畑によってわかっている。隠岐の在来種は、現在の牛馬よりも躰は小さく、農耕や運搬に利用されていた。生産が産業化されたのは明治以降であった。明治19年には海士町と知夫村で「放牛馬組合」が設けられ、明治33年には、「隠岐産牛馬組合」に改称され、牛馬の体質改良を目標にしていた。馬は政府からの要請により軍馬の改良と生産が目的となり牛は食用としての改良が行われた。平成18年に有限会社隠岐潮風ファームが設立され、島内一貫生産のブランド牛「隠岐牛」を出荷している。

生 業

船 小 屋

船小屋は、船を風雨から守るための小さな小屋のこと。海岸側に直接海から船を引き上げられるように作られており、陸に船を上げて保管する。これは、年間を通じ潮の満ち引きによる海面の小さな日本海側の漁村で見ることができ、近年なくなってきている光景である。現在海士町では宇受賀地区でのみで見られる風景となっている。

生 業

カ ナ ギ 漁

カナギ漁は、小型船から箱メガネで海中をのぞきながらサザエやアワビを探し、長い柄のついたヤスと呼ばれる漁具で刺したり挟んだりして獲る漁法のこと。エンジン付きの船を利用する方もいるが、昔ながらの櫂を使用する方もいる。現在も各地区でカナギ漁は行われているが、漁師の数は減少している。

第4章 海士町遺産の保存活用区域

4-1. 海士町遺産の保存活用区域の目的

現代社会では、社会構造の変化により歴史文化の中に失われていくものも数多くある。 海士町は、「火山の噴火による大地の形成」が歴史文化及び自然環境の礎であり、それらの 影響を受けた「島前神楽」や「崎村だんじり」を始めとする海士町の伝統文化の継承を続 けている。また、「遠流の島」として訪れた貴人たちをもてなした歴史と、海士町の地域文 化の独自性に住民自身が誇りを持ち、今後も、島外へ魅力を発信し、交流を持続していく 地域となっていくことを目指していく。海士町が今後の社会構造の変化にも対応できる持 続可能な地域であり続けるために、海士町遺産保存活用区域を設定する。

4-2. 海士町遺産の保存活用区域の基本方針

海士町遺産は地理的要因に起因する交流文化などの独自性が特徴である。これらを保つためには、海士町の文化の本質を理解する必要がある。そして、歴史文化の保全と継承を行うため、地域住民と行政が手を取り合って活動することが不可欠である。そのため、次の通り「歴史文化と自然の一体的な保存」を保存活用区域の基本的方針として設定した。

○歴史文化と自然の一体的な保存

海士町の歴史文化は地形や自然に大きな影響を受けており、「大山隠岐国立公園」、「隠岐 ユネスコ世界ジオパーク」の範囲にも含まれていることからも、歴史文化と自然を一体的 に保持していくことが期待されている。このため、地域資源としての文化財の価値を地域 住民が理解し教育及び地域振興に活用していくことで、島の持続可能な発展に貢献する。

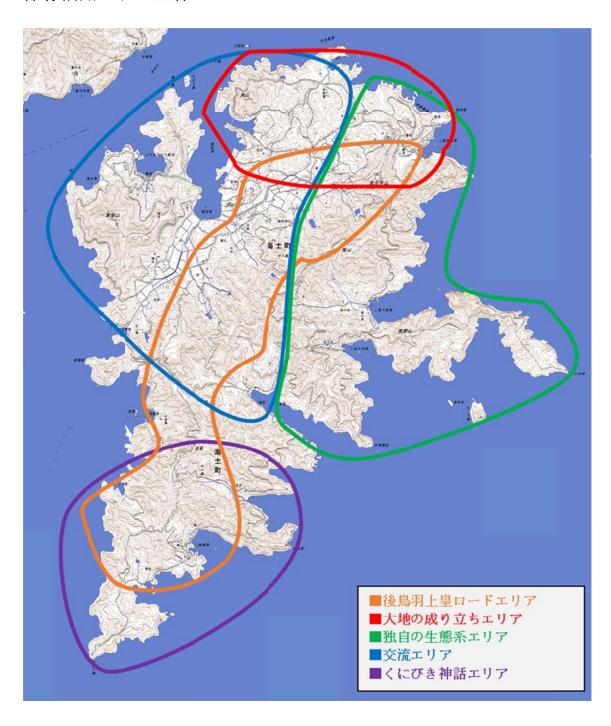
4-3. 海士町遺産の保存活用区域の設定

海士町遺産の持つ価値をジャンル別に整理することで、それが一体となって歴史的、文化的な価値を形成している様相が見えてくる。これを、それぞれの特色において、共通項別に分布域としてまとめ、保存活用エリアとして定めることで、地域の文化的な特徴が明確となる。そこで、海士町における個々の文化財について、特色毎にまとめて整理し保存活用エリアを設定する。これと、先述の基本方針に基づき、エリア設定を行うと次の5つにまとめることができる。

- ① 後鳥羽上皇ロードエリア ~後鳥羽上皇の暮らした軌跡~
- ② 大地の成り立ちエリア ~寄生火山が生み出す大地の恵み~

- ③ 独自の生態系エリア
- ~大陸の遺伝子を残す日本海に浮かぶ南国の島~
- ④ 交流エリア
- ~大陸との交流の玄関口~
- ⑤ くにびき神話エリア
- ~島内のもう1つの文化圏~

保存活用エリア全体



① 後鳥羽上皇ロードエリア ~後鳥羽上皇の暮らした軌跡~

このエリアでは後鳥羽上皇が御配流されることになった歴史的背景及び海士町に上陸してから行在所を中心として生活されて崩御されるまでの19年間の軌跡をたどることができる。また、現在の海士町に受け継がれてきた後鳥羽上皇の影響を知ることができる。

○後鳥羽上皇が御配流になる背景から行在所に到着するまで。

後鳥羽上皇の治世時代である鎌倉初期は、西日本には京を中心として朝廷の権威が残っていたが、東日本は源頼朝を中心とした武家政権が実権を握りつつあったとされている。 1221年(承久3年)、後鳥羽上皇は朝廷の権威の回復と政治の実権を取り戻すため、京都より挙兵し鎌倉幕府の打倒を目指した。しかし、鎌倉幕府側との圧倒的な兵力差により、後鳥羽上皇の軍は敗北し、指導者は次々と処罰された。また、後鳥羽上皇自身も中央政権への影響を恐れられ、遠流の地である中ノ島(海士町)に御配流されることとなった。

御配流になられた後鳥羽上皇が上陸したのは、現在の崎地区の港だと伝えられている。 それに関連する史跡として、上陸場所から御宿泊をされた三穂神社までの道中で休憩されたとされる石が「腰掛の石」として現存している。また、御宿泊をされた三穂神社も当時のままの建物ではないものの崎地区の信仰の中心として存在している。この神社で1泊された後、現在の御波地区から西地区の山の尾根伝いの旧道を通り、行在所であった源福寺へ向かったとされている。現在の西地区周辺の山中で休憩をされていた後鳥羽上皇は、牧場で牛が角を突き合わせていたのをご覧になり大変喜ばれたそうである。そのことから、島民が上皇をお慰めするための娯楽として隠岐の牛突きが始まったと言われている。

○海士町での生活

現在の行在所跡(旧源福寺)周辺は水田風景が広がり、近年全国的に失われつつある稲のハデ干しを見ることができる。この風習は、古くから海士町の食を支えてきたものであり、後鳥羽上皇が生活されていた当時も同様の景観が広がっていたと考えられる。海士町は火山島でありながら、広大な平野での稲作、牧畑農法による農作物、豊富な湧水といった大地の恩恵により、後鳥羽上皇の生活基盤の基礎が築かれていた。

後鳥羽上皇は崩御されるまでの19年間で数多くの和歌を詠まれ、その中から選定した「遠島御百首」及び「詠五百首和歌」を作成し、また、新古今和歌集を編纂した「隠岐本(御 撰本新古今和歌集)」の編集もされるなど、和歌に興じておられたことが伝えられている。

後鳥羽上皇は京都に住まわれていた頃より刀剣制作に熱を入れておられ、鍛冶 12 名で月番を定めて共に名刀を鍛えていたのを「御番鍛冶」と呼んでいた。御配流された後は、御番鍛冶を 2 か月に 1 人の周期で自らのもとに呼びよせ鍛冶に精を出していたと伝えられており、当時御番鍛冶が使用していたといわれる「鞴(ふいご)」が後鳥羽院資料館管理の保管庫で保存されている。

上皇は東地区にある金光寺山を訪れ、帰京を祈願されていたと伝えられている。現在の

金光寺権現堂には、東区民の手により菊の御紋が飾ってあり、後鳥羽上皇の勅願寺であったのではないかと伝えられている。

○現在の海士町と後鳥羽上皇

隠岐神社は後鳥羽上皇を祭神とし、崩御 700 年記念の際に創建された。隠岐神社の本殿は隠岐独特の建築様式である「隠岐造り」で建造されている。隠岐神社境内から推恵神社への道は旧後鳥羽院神社及び源福寺の聖域とされていたため、森林伐採などの開発が行われておらず、本来の海士町の植生である照葉樹林の大木が残されており、国の天然記念物のカラスバトが生息しているなど、自然生態系としても貴重な空間となっている。ここは、後鳥羽上皇の影響により開発が行われず、生態系が保全されているという、歴史と自然のつながりを感じることができる場所であると言える。

上皇の和歌にも登場する勝田池は行在所跡付近に現存しており、和歌の情景を楽しむことができる場所となっている。行在所跡地より階段を下ると、上皇の崩御後に遺骨の一部と遺灰が納められていた後鳥羽院神社が御火葬塚として現存している。御火葬塚入口の扉には菊の御紋が入っており、宮内庁によって管理されている様子がうかがえる。過去に平成天皇、昭和天皇、大正天皇が皇太子時代に参られた時の石碑も建てられており、現在の天皇家との繋がりを感じることできる場所となっている。さらに隠岐神社創建時の奉納物が保存されている「後鳥羽院資料館」と後鳥羽上皇のお世話をしたという由緒をもつ旧家の家屋を展示館とした「村上家資料館」が付近にある。

■保存活用区域を構成する主な海士町遺産

モノ:御火葬塚、隠岐神社、推恵神社、三穂神社、源福寺、金光寺、村上家資料館

コト:隠岐の牛突き

ヒト:後鳥羽上皇、御番鍛冶

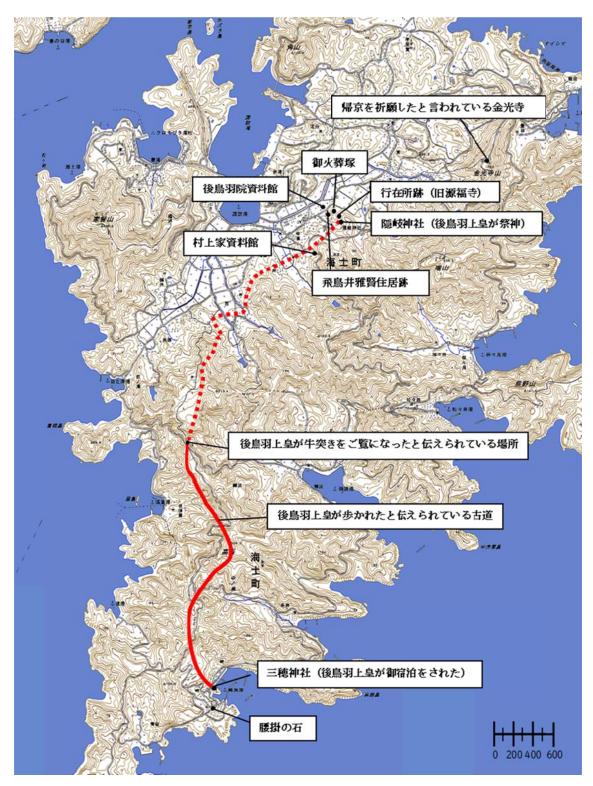


図1:①後鳥羽上皇ロードエリア

② 大地の成り立ちエリア ~寄生火山が生み出す大地の恵み~

このエリアは火山の噴火がもたらした大地の成り立ちから、現代の人の営みが築かれる までの関連性が感じられるエリアとなっている。

○寄生火山が形成した奇跡の大地

島前の中央部には海に面した焼火山があり、その周辺を各島が取り囲んでいる。この地形は約600万年前に起こった大規模な火山噴火により火山帯中央が陥没したことで形成されたカルデラとその周辺の外輪山である。このカルデラの外輪山は波に侵食され、3つに分かれて島前3島となり、海士町はそのひとつである。この外輪山3島の中で、海士町にのみ広大な平野があることは非常に興味深い。これは大噴火で形成された外輪山とは別にその周辺で起きた小火山(寄生火山)によってもたらされた地形である。海士町の平野を形成したのは、約280万年前の明屋海岸付近の噴火である。外輪山として誕生した当初の海士町の地形は、豊田地区から西地区にかけては深く切れ込む入江の海であった。そして、この噴火による溶岩などの噴出物が外海側を塞ぎ、その後さらに流れ出たマグマが海士町北東部の入り江を埋め立てたことにより広大な平野が形成された。

○火山の噴火と人の営み

豊田地区では、明屋海岸付近の噴火による火山の噴出物が堆積したスコリア丘が見られるほか、近辺で噴火した証拠ともなる火山弾も観察することができる。この明屋海岸には比奈麻治比売命が宇受賀命の子「柳井姫」を出産したという神話があり、出産する際に使用した屛風とたらいが岩となり、現在の「屛風岩」と「たらい岩」となったという伝説も残っている。

北分地区では、角山が噴火したことにより火山灰が噴出され、それを含んだ土である「カバ土」が形成された。「カバ土」は栄養が少なく水はけが良いためサツマイモを育てる環境に適しており、対馬暖流のもたらす温暖な気候と相まって、現在でもサツマイモの栽培は続いている。

宇受賀地区周辺で見られる火山岩は宇受賀玄武岩と呼ばれており、マントルの成分であるカンラン石を取り込んだ玄武岩が見つかることがある。このカンラン石を取り込んだ玄武岩は、歳旦祭に宇受賀命神社で行われる神事「あご石神事」で使用されている。あご(トビウオ)に見立てた玄武岩を「あご石」として歳旦祭の際に本殿下に納め、前年納めた「あご石」を海の方角に向かって「大漁」の掛け声とともに投げる。この「あご石神事」は豊漁と豊作を祈る予祝行事と言われており、本土では類似した神事は見当たらない。あごを題材とした神事として、奄美地方や国外では台湾の原住民がトビウオ漁期に船を使用したトビウオの豊漁の意味を持つ祭りを行うことが確認されている。いずれもトビウオの産地となる南方であり、海士町のような位置にある島の神事が南方の祭り文化と類似するのも、対馬暖流のもたらす文化のつながりと言えるだろう。

東地区では、金光寺山頂上付近や天川の水で確認される「淡水レンズ」と呼ばれる海水面の上に淡水の層ができる自然現象が起こる。金光寺山山頂部で湧水が出ているのは、海水の圧力によって淡水が押し上げられることによって、高低差関係なく淡水が湧きあがるためだと言われている。その他、島内のいたる所で湧水を確保することができ、牧場にも利用されている。離島という限られた土地を最大限に利用する「牧畑」と呼ばれる四圃式農法が各所で行うようになったのも、火山島が故に複雑で痩せた土地を逆手に取った工夫である。「牧畑」は隠岐のみで行われていた世界的に類を見ない特殊な農法であり、入会権による放牧であるため地域内交流にも欠かせない要素であった。このように、火山の噴火は海土町の大地を形成しただけではなく、住民の生活を支える湧水や牧畑という独特な農法、また神事などの文化の基礎を形成した重要な要素だと考えられる。

■保存活用区域を構成する主な海士町遺産

モノ:スコリア丘、カルデラ、淡水レンズ

コト: 屏風岩とたらい岩、あご石神事

ヒト:サツマイモの栽培、牧畑



図 2: ②大地の成り立ちエリア

③ 独自の生態系エリア ~大陸の遺伝子を残す日本海に浮かぶ南国の島~

このエリアでは隠岐ユネスコ世界ジオパークのテーマとなっている「独自の生態系」を 体現している。植物相を代表として特殊性を形成しているエリアである。

○自然環境の成り立ち

海士町の自然環境の成り立ちの説明には、地球全体の環境の変遷を見て行く必要がある。 地球は氷期を何度も繰り返してきたことが分かってきている。約2万年前に地球が最終氷期であった時代には、隠岐諸島周辺の海水が、現在の水位より120m~140mも低下していたと言われている。現在は、隠岐と島根半島との間が水深約70mの浅い海でつながっており、氷期サイクルの中では何度も本土とつながり半島の突端部になったと考えられている。つまり、直近では約2万年前の最終氷期に、隠岐諸島は海水面の低下により島根半島と陸続きとなり半島になったが、その後の温暖化に伴う海水面の上昇によって約1万年前に現在のような離島となる。そして、その後、本土とは一度も陸続きにはなっておらず離島の状態が続いている。このように、隠岐諸島が何度も本土と陸続きになったり離れたりしたことが、海士町の自然環境を形成した重要なポイントの1つである。

もう 1 つ重要な要素として、周辺を取り囲む海域の影響がある。日本海沿岸部に流れる 海流は、九州で太平洋側と日本海側とに分岐し太平洋側は黒潮、日本海側は対馬暖流と呼 ばれている。隠岐諸島はこの対馬暖流の影響を強く受けながら、周囲を海で囲まれている ことによって生まれる海洋性の気候と相まって、夏は涼しく冬は暖かい気候となっている。

○海士町の生態系の特徴

海士町に生育する植物については、温暖な気候を好むものの分布が目立ち、生育地の北限境界となっているものも多く見られる。隠岐諸島は上記のような海洋性気候により、同緯度の福井県よりも温暖な気候が保たれ、「ハマビワ」など九州、沖縄地方と同様の植生もみられる。「シロウマアサツキ」や「エゾイタヤ」などの寒地系の植物が、標高に関係なく沿岸部などでも生育できていることも生態系の特徴の1つとなっている。これは、対馬暖流及び海洋性気候による霧の発生と夏季の最高気温が抑えられていることの影響や、火山島であるため土壌が痩せており適地植物からの被圧が少ないことも関係していると考えられる。さらにユーラシア大陸系の植物も生育している。これらは九州の北にある対馬海峡が大陸と陸続きになった最終氷期以前の氷期に、日本列島に移ってきた植物が隠岐諸島にまで分布を広げたものと考えられており、本土ではほとんど見られない「ダルマギク」や「チョウジガマヅミ」などがこの地で生育している。これらの暖地系、寒地系、ユーラシア大陸系の植物に加え、離島の隔離された環境によって進化した固有種が生育しており、高低差に関係なく混在して分布していることが隠岐の生態系の特徴である。

動物については、隠岐諸島で見られるものはもともと本土に生息していたもので、隠岐諸島が本土と陸続きだった時代に隠岐諸島へ渡ってきたものが、約 1 万年前に本土から完

全に切り離されたことにより、そのまま隔離されたものと考えられる。隠岐諸島と本土の間にある海峡を挟んだ対岸の島根半島と隠岐の生物相には一見差が無いようにも見えるが、隠岐諸島には大型の哺乳類が生息してらず、かつ固有種がいることなど見ることのできる生物に違いがある。また、隠岐諸島の中でも、島ごとに見られる生物が異なる。これは、最終氷期に半島の一部であった隠岐諸島に移動してきた生物とそうでない生物がいたため、移動してきたものの何らかの要因で滅んでしまったものもいるためと考えられる。隠岐諸島には大型の哺乳類が生息していないことについて、小型獣は隠岐諸島まで到達できたが、半島の途中に大型獣の到達を阻んだ何らかの障壁があったか、もしくは、渡ってきた小型獣は生き残れたが大型獣は絶滅してしまったとの理由が考えられる。

○独自の生態系エリアの特徴

海士町は隠岐諸島の一部であるため、他の島と同様の生態系が基本となっているが全く同じではなく海士町の独自性も見られる。特に暖地系の植物分布として、北限植物を多く観察することができる。明屋海岸の「ハマビワ群落」や「アイアシ」などは生育の北限地となっているわかりやすい事例である。植生の混生も各所で観察できる。例えば、寒地系植物である「エゾイタヤカエデ」は金光寺山に生育しているが、その周辺で暖地系植物の「ヤブツバキ」が生育しており、珍しい植生となっている。

固有種も同様に観察することができ、「オキアカネズミ」や「オキヒミズモグラ」などの哺乳類、「オキタンポポ」や「オキノアザミ」などの植物、「オキマイマイカブリ」や「オキオサムシ」など地上徘徊性の昆虫、「オキマイマイ」や「オキゴマガイ」などの陸産貝類など、数十種が確認されている。生物調査は民間団体により継続的に行われており、近年の調査では、島後でのみ確認されていた陸産貝類の固有種「ヒメナミギセル」が豊田地区で発見された。また、国内では3例目の記録となる「ミヤマホオジロ」の繁殖が保々見地区で確認されている。さらに、近年島根県内において確認されていなかった「ウミウ」の繁殖が宇受賀地区で発見され、その他に隠岐諸島初となる「ハチクマ」などの希少鳥類の繁殖もこのエリア内で確認されるなど調査の成果がでている。

明屋海岸付近には国内で海士町にのみ生育する植物「タケシマシシウド」の大群落があり、6月に開花し白い花畑になるため観光面においても重要な場所となっている。また、この周辺では希少種である大陸系植物の「マルバウマノスズクサ」の大群落も観察できる。

○エリア外の重要なポイント

海藻「クロキヅタ」は菱浦湾から西ノ島別府湾にかけて生育しており、この地区はその 生育地として国の天然記念物に指定されている。クロキヅタは温暖な海域を好む海藻で、 アラビア半島の紅海や瀬戸内海の一部地域でのみ生育が確認されている。

周辺の無人島も海士町の生態系にとって重要な場所である。二股島には、希少鳥類である「オオミズナギドリ」や「ウチヤマセンニュウ」が繁殖しており、専門家によるモニタ

リング調査が継続中である。また、島根県最大の無人島である松島は照葉樹が繁茂する島であり、国の天然記念物「カラスバト」の町内最大の越冬地となっている。

■保存活用区域を構成する主な海士町遺産

モノ:クロキヅタ、カラスバト、ハマビワ、ヤブツバキ、タケシマシシウド

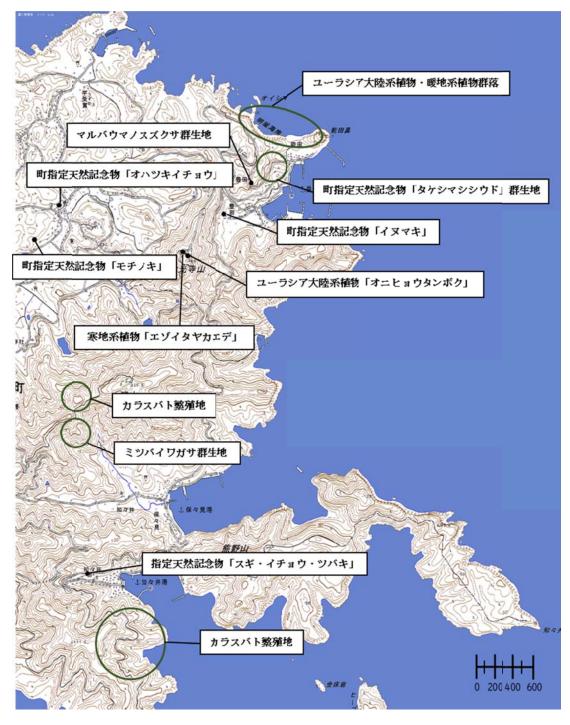


図 3: ③独自の生態系エリア

④ 交流エリア ~大陸との交流の玄関口~

このエリアは本土から大陸、または隠岐諸島内の他の3島の中間地点であったため中継地として機能していたと言える。史跡や古文書などから本土や大陸との交流の軌跡を知ることができる。古代では海上交通による交流から島前の玄関口として機能し、そして、交流から生まれた文化は内陸部へと浸透していった。

○神社から見る交流

海士町の交流の歴史は神社の位置からも知ることができる。宇受賀命神社の祭神である宇受賀命は、隣の西ノ島の宇賀地区の比奈麻治比売命神社の比奈麻治比売命と結ばれ、柳井姫をもうけ、柳井姫は豊田地区の奈伎良比賣神社の祭神となったと伝えられている。宇受賀命神社、比奈麻治比売命神社、奈伎良比賣神社の3社は直線状に並んでおり、古くからの西ノ島との文化的な結びつきが伺える。また、以前の宇受賀命神社は大陸を見据えることのできる高い位置に鎮座されていた。この神社は律令時代に名神大社として創建されており、本国の国防の要として重要な役割を担っていたのである。古代より、海士町は中央と結びついていたことがうかがえる神社である。

○古代の交流

古代のこのエリアは島前の玄関口として機能しており、縄文時代に島後で産出された黒燿石が郡山遺跡跡(福井)などから大量に出土したことや、弥生時代の竹田遺跡(東)より出雲国と関連があると考えられている銅剣が出土したことから、古くから島後や本土との中継地であったことが分かる。

郡山遺跡付近は、現在の海士町の小字名を記録している最古の資料「慶長拾八年隠岐国海士郡福井村御検地帳」から「郡崎(くんさき)」と呼ばれていたことがわかっている。このことより、「郡(こおり)」の字は当時の行政区画を指し、「郡衙(ぐんが)」と呼ばれる現代の役所に相当するものがあったと考えられる。正面に当時の良港であった諏訪湾があり、周辺には縄文時代以降の遺跡が多数発見されていることから、郡山遺跡周辺が栄えていたことを表している。

隠岐は神亀元年(724年)に「遠流の島」に定められたことが延喜式に記載されており、 小野篁、後鳥羽上皇を始めとした位の高い人物や政治犯の遠流の地であった。江戸時代以 降は一般の罪人も流されるようになった。また、藤原宮跡や平城京跡から出土した木簡よ り、海士町の干し鮑やナマコ、イカなどの海産物が朝廷に献上されていたことが確認され ており、古くから海士町は都と結びつき中央政権との交流が行われていたことがわかる。

○戦国時代の交流

戦国時代には、尼子方と考えられる海賊が海士町に攻め入ってきたが、当時豪族であった村上家は居城である因屋城に籠城し応戦したと言われている。周辺は丘陵地になってお

り正面は見晴らしがよい海辺となっていたことから因屋城は少人数での籠城を可能とした。 海賊を撃退した功績から、毛利方の小早川隆景より感謝の書状が送られている。現在、因 屋城は土塁と切堀が残っており、当時の情景がうかがえる。また、毛利元就の相続争いに 巻き込まれ、戦いを生き延びた渡邉美作守亮が現在の崎地区に移住し、有力者となったと 言われている。

○江戸時代の廻船による交流

江戸時代に入ると、菱浦、日之津、日須賀などは廻船(北前船など)の風待ち港として利用されていた。村上家が隠岐に独自の航路を開拓し、遠くは京大阪まで広げた。このことにより財を成した家柄も多く、村上家を中心とした多数の文献に記録が残されている。また、隠岐民謡「キンニャモニャ」、民謡「伊勢音頭」、石州瓦による赤い屋根の景観、砂岩の石仏など、廻船を通して島外から伝わった様々な文化が地域に根づいており、海士町の玄関口である各港を通して内陸側に広がっていることがわかる。このように海を介した交流は古くから様々な様相を呈しており、現在の海士町の文化の礎を築いたことがわかる。

エリア外の重要なポイント

エリア外では、古くから各地に海難慰霊碑や商人の墓が存在している。特に御波地区にある百墓には、200 基以上の五輪墓が残されており、朝鮮風の墓も見られることから、他国との交流の軌跡もみられる。現在の知々井港も中港と呼ばれた島外との交流の重要拠点となっていたと言われている。

■保存活用区域を構成する主な海士町遺産

モノ: 宇受賀命神社、奈伎良比賣神社、郡山遺跡、竹田遺跡、因屋城

海難慰霊碑、百墓

コト:キンニャモニャ、伊勢音頭

ヒト:小野篁、小早川隆景

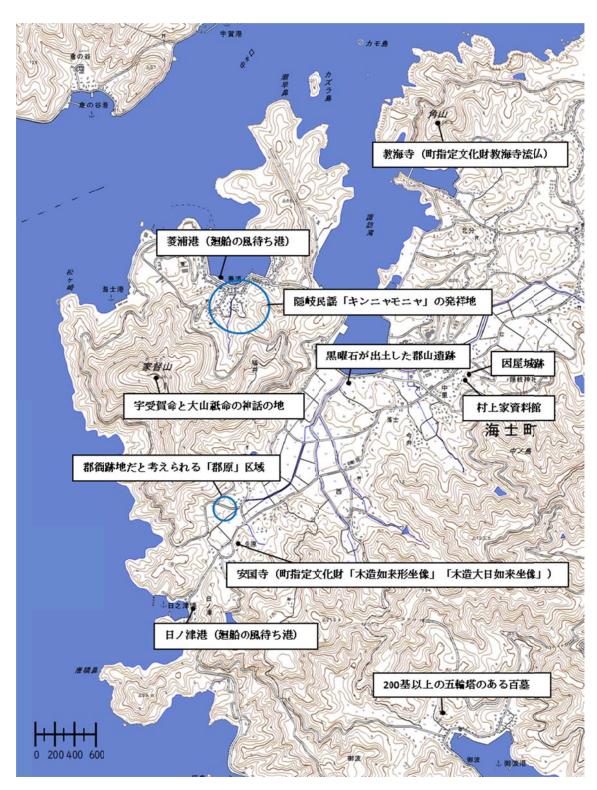


図 4: ④交流文化エリア

⑤ くにびき神話エリア ~島内のもう1つの文化圏~

このエリアは、本土に最も寄った島の最南端地区にあり、「くにびき神話」で「佐伎の国」 の名前が登場するほど古代から認知されていた地域である。ここは、丘で囲まれた独立し た地区であり、地域内で生活を完結させる必要があったことから、他の地区とは異なった 独特の雰囲気や団結力を感じることができる。さらに、戦国時代に島根本土より移住して きた渡邊家の影響もくにびきエリアの独特の雰囲気の一因であると考えられる。

○くにびき神話について

出雲に残る出雲風土記に記載されている「くにびき神話」では、出雲の国が未完成なことを憂いた八東水臣津の命が 4 つ国から国を引き寄せて縫い合わせ、現在の島根半島が形成されたとされている。その中に記載されている「北門の佐伎の国」が現在の崎地区と多井地区のことを指していると伝えられていることから、崎地区と多井地区は古代より出雲王朝と関わりがあったことが分かる。崎地区の中良公園には地区住民の手により設置された「佐伎の国」の碑があり、くにびき神話に対する地域住民の思いの強さがうかがえる。

○古代の玄関口であったくにびき神話エリア

黒曜石が発見された西宮前遺跡をはじめ、くにびき神話エリアからは数多くの古代の遺跡が発見されていることから、古代からくにびきエリアでは人の営みが盛んであったことがわかる。このことから、本土と最も近いこのエリアは古代の島外との交流の重要地点であったと考えられる。

○戦国時代の崎村

戦国時代には毛利家の跡継ぎ争いに巻き込まれた渡邊家(中良家)が島根本土より崎地区に移住し、地域住民の協力により地区の有力者となったと言われている。地域住民と共に発展を続けたことから、他の地区と異なる独自の団結力が形成されたと考えられる。この崎地区の団結力は独自で行っている「崎村だんじり」にも表れている。このだんじりは、崎地区出身の廻船(北前船など)の船員によって持ち込まれたものとされ、平成元年までの35年間は人材不足のため行われなくなっていたが、現在では地区住民の結束により復活を遂げた。

○近代から現代までのくにびき神話エリア

明治以降、渡邊家は後醍醐天皇が建光寺の山伏の協力を得て隠岐を脱出したことに習い、 山伏の協力を得るために別府村(西ノ島)から崎地区に建興寺を移転させたと言われてい ることから、本土だけではなく他の島との交流も行っていたことが分かる。

崎地区の住民は文化的な活動を数多く行っている。日露戦争で功績をあげた乃木将軍の 名馬寿号を偲び、渡邊家をはじめとした地区有志により寿号の墓の建立を行った。また、 その渡邊家の存していた跡地の中良公園には、渡邊家の解説看板の設置を行った。さらに、 そのような郷土の歴史を継承するため、地区内の郷土史研究会の手により、郷土史の発行 も手がけた。地区独自で文化財の保存活用を行う気運があり、郷土愛の深さをうかがうこ とができる。また、衰退したみかん栽培を復活させる「崎みかん再生プロジェクト」が進 行中であり、郷土愛から生まれた地区の活気も感じられる場所でもある。

■保存活用区域を構成する主な海士町遺産

モノ:中良公園、西宮前遺跡、建光寺、寿号の墓

コト:くにびき神話、崎村だんじり、

ヒト:後醍醐天皇、渡邊家(中良家)、乃木将軍

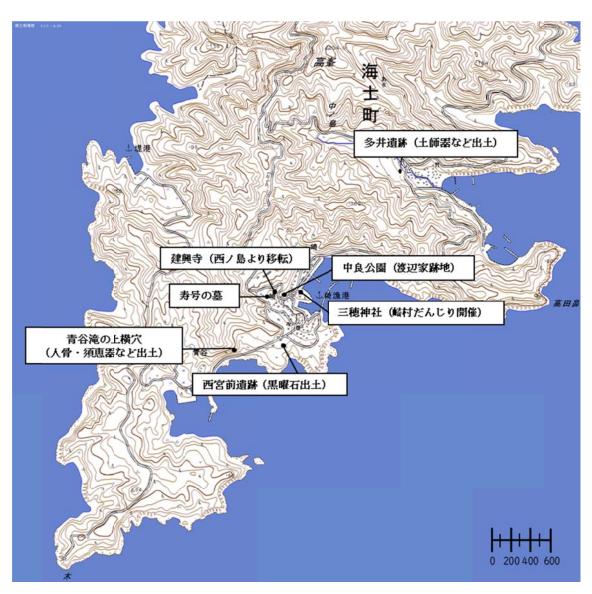


図 5: ⑤くにびき神話エリア

第5章 海士町遺産の保存活用計画

5-1. 海士町遺産の保存活用のための体制

今回策定した歴史文化基本構想を推進するために、海士町総合振興計画などとの連携が必要である。また、海士町遺産を保存活用するために、地域住民、海士町教育委員会を中心とした行政関係者、文化財保護審議委員、地域の有識者、地域の民間団体などが連携して推進する体制づくりが重要となる。

5-2. 海士町遺産を保存活用するための課題

現在の調査では、現存する慣習や生活面での文化までは網羅できていないため、それらも 文化財として捉え継続的な調査と資料の収集を実施していくことが望ましい。課題として は、地域住民との連携、新たな文化財指定、無形文化財の継承、海士町の生活様式の把握、 海士の方言の把握、近代の行政文書の保存、ふるさと教育への活用、教育観光や定住施策 での活用の8つが挙げられる。

○地域住民との連携

地域住民と行政が地域に根付いた文化の情報共有を行いながら一体となって継承する。

○新たな文化財指定

歴史、文化、自然について、専門家の知見を得ながらより深く研究を重ね、特に重要と 思われるものに対し、新たな文化財指定を進めていく。

○無形文化遺産の継承

無形文化遺産として、指定の無形文化財のみでなく各地区に未指定の祭り、神事など独自のものが残されている。無形文化財は各地区で継承が行われているが、その方法が確立されていないため、任意の指導者に委ねられているのが現状となっている。このままでは地区に保存されてきた無形文化財の本質が失われる可能性があるため、早急に継承方法の体制づくりが求められる。

○海士町の生活様式の把握

町内では、地域住民の日常生活の中に伝統的な慣習が残っているものがある。例えば、食事の慣習である「本膳」は、膳の最後にご飯とお味噌汁が出てくるが、家主が良しと言うまで箸をつけてはならない決まりがある。他にもこのような慣習について、調査による記録整理を行い、後世に伝えていくことが重要であると考えられる。

○海士の方言の研究

現在の海士町は 14 地区に分かれており、それぞれの地区で方言に違いが見られる。言語はコミュニケーションの重要な要素であり、方言から交流を行っていた場所、年代や流人からの影響を考察することができるため、海士町全体及び各地区の方言を調査、整理し、記録する必要がある。

○近代の行政文書の保存

近代の行政文書はある一定期間を過ぎると、整理のために処分されることが多い。行政文書は、その時代ごとに海士町の様子を記録しているものであり、将来的に貴重な資料になる可能性も高い。意識的に残していくために関係部局での協力体制を構築する必要があると考えられる。

○ふるさと教育への活用

歴史、文化、自然の情報を整理し、わかりやすく冊子などにまとめ、地域の子供のふる さと教育利用を活発にする。

○教育観光や定住施策での活用

今回整理された歴史、文化、自然の認知済みの魅力や新知見をとりまとめ、教育観光や 定住施策等での利用を目指していく。

5-3. 海士町遺産の保存活用方針

海士町遺産は地理的要因に起因する交流文化などの独自性が特徴である。歴史文化の保全と継承を行うため、地域住民と行政が手を取り合って活動することが不可欠である。持続可能な海士町遺産の保存活用へ向け、前述でかかげた課題への具体的な保存活用方針を【保存】と【活用】に分け次のようにまとめた。

【保存】

○継続的な文化財の調査・見直し

現在の調査、保存体制を続けていくために、地域住民と行政が連携を図る仕組みづくりが必要不可欠である。特に各地区が管理する有形文化財や無形文化財は、そこに住む住民が中心となり、各地区ごとに異なった状況での保管と保存が行われているので、行政が行う文化財保護審議委員会による文化財パトロールの活用が重要なものとなる。その際、適切な保存管理方法を知る有識者と地域の管理者が同行し、管理方法に誤りがある場合は指導、助言による管理方法の改善を実現していくことが望まれる。

新たなる海士町遺産の調査を効率的に行うために、民間団体、行政、及び地域から文化 財に関する情報を適宜収集できるような体制の整備が必要であると考えられる。また、提供された情報に基づいて文化財保護審議委員会による活用及び保存へ向けた検討の実施が望まれる。

○後世へつなぐ継承のバトン

地域の行事における伝統を守るためには、「いつ、どこで、だれが、なにを、なぜ、どのように継承されてきたか」ということを明確にすることが重要である。原型や由来を知り、その根幹を保持していくことが伝統を守ることの軸となると考えられる。時代の流れの中で行事、神事などの形が変遷していくことは避けられないことであるが、原型を理解しているかどうかで、その変化に対応し、継承されていく内容に大きな差が出ると考えられる。本質を置き去りにして形だけが継承されてしまうことを避けるため、行事、神事などの意味やしきたりを整理したうえで記録に残すなど継承の形を検討する必要がある。

【活用】

○海士町まるごと教育の島

海士町では島前高校魅力化プロジェクトを中心とし、教育のブランド化に力を入れている。学校での学習だけでなく、地域、家庭との連携を深めた教育を推進していく中で、海士町遺産を取り入れた授業を実施することで、海士町遺産の独自性の理解が深まり、郷土愛を育むふるさと教育の推進が図られる。また、ふるさと教育は、副次的に歴史文化の継承の基礎を築くことが予想される。

○地域の未来をつくる人材の育成

現在、島前高校の卒業生は島外へ行き、将来的に島へ戻る割合は高くない。その対策として、海士町遺産を取り入れたキャリア教育に力を入れることで、島外で生活した際に海士町と島外の文化を比較し、島の文化の独自性や重要性を理解し、地域に魅力を感じることで、将来島に戻り、地域の未来をつくる人材の育成を図る。

○資源を持続可能にする環境教育の推進

世界ジオパークに認定された隠岐は、自然環境と歴史文化が密接な関係を築きながら発展してきたことも大きく評価をされており、ジオパークを理解することで、現在まで受け継がれてきた歴史文化を地域性と関連付けて知ることができることから、海士町の独自性を育んだ自然環境を学ぶことも重要であり、環境教育を行う必要がある。

○文化財関連の観光名所を地域交流の場として活用

海士町では住民の約2割以上が移住者であることから、観光のイメージは薄いと考えられる。海士町内の観光名所の価値は地域を知ることで増してくるものであると考えられるため、海士町遺産保存活用区域の看板を追加整備することで、地域の特徴の理解を促すことができる。さらに、観光名所において、海士町遺産を用いた「教育観光」を実施する際に地域住民を巻きこむことで、そこを交流の場としても活かすことができる。

5-4. 海士町遺産保存活用区域での取り組み

自分の住む地域の歴史文化を理解し、地域の遺産として継続的に保存をしていく場合、 風化を防ぐための保存をしているだけでは、モノとしての文化財の保全は図られても、ヒトに対し、後世へ歴史文化の重要性を伝えることが困難になる。活用にも焦点をあて推進 していくことが、持続可能な海士町遺産の保護に繋がると考えられる。

4章で設定した各エリアでの、保存と活用の両面からの取り組みを次の資料でまとめた。

全エリア共通の保存活用への取り組み

【保存】

- ・海士町遺産の継続的な調査と適切な管理
- ・専門機関(大学、博物館等)との連携
- ・学校、資料館、図書館との連携
- ・関連する海士町の取り組みや計画との連携
- ・調査結果の定期的な成果報告

【活用】

- ・海士町遺産を活かしたふるさと教育の実施
- ・海士町遺産についての講座の開催
- ・海士町遺産の住民主導による活用の体制づくり
- ・海士町遺産の観光資源としての活用
- ・地域メディアを活用した調査結果の発信

① 後鳥羽上皇ロード ~後鳥羽上皇の暮らした軌跡~

エリアでの取り組み

【保存】

- ・後鳥羽上皇の歩んだ道のりの調査、整備 (崎地区の港の看板設置、旧道の調査及び整備、休憩された場所の看板設置)
- ・後鳥羽上皇に係る和歌及び古文書の調査、記録
- ・後鳥羽上皇の和歌を各所に掲示

【活用】

- ・後鳥羽上皇に関するツアーや講座の開催
- ・旧道の歴史観光資源として活用
- ・住民が和歌に親しむための体制づくり

② 大地の成り立ちエリア ~寄生火山が生み出す大地の恵み~

エリアでの取り組み (案)

【保存】

- ・湧水マップの作成
- ・小火山(寄生火山)と住民の生活の関連性の調査、記録
- 明屋海岸周辺の自然解説資料作成
- ・農業遺産としての石垣と周辺環境の保存
- ・北分地区のカバ土の情報案内板の設置

【活用】

- ・体験プログラムの作成
- ・火山による大地の成り立ちを活かした環境教育プログラムの作成、実施

③ 独自の生態系エリア〜大陸の遺伝子を残す日本海に浮かぶ南国の島〜

エリアでの取り組み (案)

【保存】

- ・海士町の「独自の生態系」に関する調査、記録 (海洋性気候、対馬暖流の影響、植物の多様性、植物相、動物相)
- ・希少種、重要種、固有種の情報の調査、記録
- ・固有種、暖地系、ユーラシア大陸系、寒地系植物の調査、記録
- ・海士町希少野生動植物保護条例との連携事項の整理
- ・海士町の「独自の生態系」を立証する事物への看板の整備
- ・希少種の継続的なモニタリング調査

【活用】

- ・住民主導による自然環境保全活動の計画と実施
- ・「独自の生態系」を活かした環境教育の実施

④ 交流エリア~交流人の玄関から奥座敷へ~

エリアでの取り組み (案)

【保存】

- ・西廻り廻船の寄港地の調査、記録
- ・廻船での取引資料の調査、記録
- ・郡衙、遺跡に関する資料の調査、記録
- ・各地区に残る慣習、風習の調査、記録
- 伝統芸能等の調査、記録

【活用】

・調査結果や伝統芸能を発表し、地域住民が愛着を持つ体制づくり

⑤ くにびき神話エリア ~島内のもう1つの文化圏~

エリアでの取り組み(案)

【保存】

- ・くにびき神話エリアに残る郷土資料の調査、記録
- ・崎村だんじり継承のための内容の調査、記録
- ・くにびき神話エリアのマップ整備や看板整備
- ・くにびき神話エリア内の漁村景観の維持

【活用】

・くにびき神話エリア内の特徴的農作物の広報活動

5-5. 今後目指していく海士町遺産を活かした地域づくりの方針

海士町遺産は、指定の文化財と未指定の文化財及びその周辺環境を総称したものをいう。 継承されてきた海士町独自の歴史文化の本質が風化することを防ぐため、住民が中心となった保全活動が必要となる。これは、海士町の独自性のある歴史文化を理解し、恒久的に 継承されていく効果があると考えられる。そのため、保存活用について次の 3 つの事項を 目指していきたい。

1. 地域住民が郷土に誇りを感じる地域づくり

海士町遺産の保存活用を通して、地域住民が地域の歴史、文化、自然についての知識を深め、自らが住む地域に誇りを感じ、行政と共にいきいきと生活できる地域づくりをしていく。

2. 子供たちが地域の文化から未来を学ぶ地域づくり

海士町遺産の保存活用を通して、子供たちが地域の文化とふれあい、深く体感しなが ら学ぶことで、昔の知恵から得たものを、地域づくりに活かす教育を行っていく。

3. 地域住民が海士町の魅力を再発見し、発信する地域づくり

海士町遺産の保存活用を通して、海士町の魅力を再発見し磨き上げ、島内のみならず島外へも広く情報発信し、活力ある交流を生みだすことができる地域づくりを目指す



海士町歴史文化基本構想

発行年月/平成30年3月

編 集/海士町教育委員会地域共育課



平成29年度文化庁文化芸術振興費補助金 (文化遺産総合活用推進事業)